

山梨市文化財調査報告書 第16集

薬師堂遺跡

— 牧丘東部地区用排水路第12号の整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2012年3月

山梨県峡東農務事務所
山梨市教育委員会
財山梨文化財研究所

薬師堂遺跡

— 牧丘東部地区用排水路第12号の整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2012年3月

山梨県峡東農務事務所
山梨市教育委員会
(財)山梨文化財研究所

序

本書は、山梨県峠東農務事務所による農業用排水路の改修に伴って行われた薬師堂遺跡発掘調査の報告書です。調査地の牧丘町千野々宮には国指定重要文化財の本殿を持つ中牧神社が鎮座するなど、古くからの歴史を残す地域です。

調査では縄文時代から弥生時代にかけての土坑5基などが検出されました。市内では弥生時代の遺構の発見は少なく、調査地周辺での発掘調査事例も少ないとことから、貴重な資料となりました。

最後になりますが、調査を担当していただいた(財)山梨文化財研究所の皆様をはじめ関係各位に心から感謝申し上げ、序といたします。

平成24年3月15日

山梨市教育委員会

教育長 丸山森人

例　　言

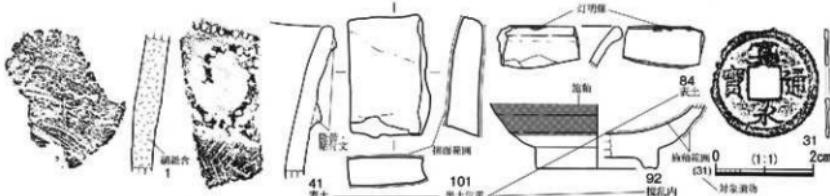
1. 本書は山梨県山梨市牧丘町千野々宮・蘿平に所在する薬師堂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は牧丘東部地区用排水路第12号の整備事業に伴い、山梨県岐東農務事務所より委託を受けて(財)山梨文化財研究所が実施した。
3. 本書の原稿執筆・編集は、望月秀和が行った。
4. 発掘調査における基準点測量、ポール写真撮影、全体図作成業務を㈱テクノプランニングに委託した。
5. 本書に関わる出土品・記録類は、山梨市教育委員会で保管される。
6. 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい。(順不同、敬称略)。

保坂康夫 綱倉邦生 野崎進 中山誠二 佐々木満 稲垣自由 河西学 橋原功一 三澤達也 雨宮弘聰

凡　　例

1. 本書におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系(原点:北緯36度00分00秒)、東経(138度30分00秒)に基づく座標数値である(世界測地系数値)。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北である。
2. 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

土坑(SK)、溝状遺構(SD) : 1/40	ピット(Pit) : 1/40	全体図: 1/80
土器: 1/2	石器: 1/2 (小型品は原寸大)	
3. 本書に掲載した遺物の番号は、実測図、写真図版、出土位置を示したドットの番号全てを一致させた。また、その経過を示すため、観察表において対応する遺物取り上げ番号および実測番号を掲載した。
4. 遺構図版中の遺物点をつなぐ実線は接合した2点の接合関係、破線は同一個体である可能性を示す。
5. 遺構図中に示した遺物ドットは、各図版に凡例を示している。
6. 遺物実測図については下図の通り。
断面中の破線は接合帯(隆帯、貼付文など)、トーンは纖維含、遺物実測図の内外面のトーンは施釉、黒色ベタは灯明痕(煤)、断面外側の実線は擦り面範囲、薄い破線は施釉範囲を示している。
なお、図版中で縮尺を変更した遺物については、別スケールを付け、()内にその番号を示した。



7. 土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』(2006年度版)を使用した。
8. 本書図版中に使用した元地図は以下のとおりである。

第1・2図	国土地理院発行 1/25,000『川浦』及び工事設計図
第5図(左上)	山梨市牧丘町千野々宮地区地籍図(任意縮尺)
第5図(下)	国土地理院発行 1/200,000『甲府』
第6図	山梨市 1/10,000『山梨市全図その3』
9. 参考文献については各章の文末にまとめた。

目 次

例言・凡例

目次

表目次

図版目次

写真図版目次

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯 1

第2節 調査の経過 1

第3節 調査の方法 1

第4節 基本層序と確認面について 2

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境 4

第2節 歴史的環境 6

第3章 発見した遺構と遺物

第1節 土坑 9

第2節 ピット 9

第3節 溝状遺構 12

第4節 出土遺物について 14

第5章 総括

第1節 検出した遺構・遺物について 23

第2節 縄文時代早期末の遺物に伴う水晶片について 24

第3節 牧莊についての若干の検討 24

おわりに

表目次

第1表 周辺遺跡一覧 6

第2表 遺構一覧 12

第3表 出土遺物観察表（土器・陶磁器類） 16

第4表 出土遺物観察表（石器・石製品類） 17

第5表 出土遺物観察表（古錢） 17

図版目次

第1図 対象地位置図 2

第2図 調査区配置図 2

第3図 調査区全体図 3

第4図 基本層序図 4

第5図 遺跡の位置 5

第6図 周辺の遺跡 7

第7図 遺構図（土坑） 10

第8図 遺構図（ピット） 11

第9図 遺構図（溝状遺構） 13

第 10 図 出土遺物 (SK 1・3・4、Pit1・2・7)	18
第 11 図 出土遺物 (SD 1、調査区西端)	19
第 12 図 出土遺物 (遺構外・試掘 1)	20
第 13 図 出土遺物 (遺構外・試掘 2)	21
第 14 図 出土遺物 (遺構外・試掘 3)	22
第 15 図 出土遺物 (石器・石製品)	23

写真図版目次

- 図 版 1 調査区周辺景観、調査区空撮（モザイク写真）
 図 版 2 調査前・完掘後近景
 図 版 3 遺構写真 [SK1～5]
 図 版 4 遺構写真 [SK5、Pit1～4・6～10・16]
 図 版 5 遺構写真 [Pit11・13・15、SD1]
 図 版 6 調査風景、埋め戻し状況、検査・確認状況、周辺写真〔御堂（精進家屋敷神）、中牧神社〕
 図 版 7 遺物写真 [SK1：1～4、SK3：5～11、SK4：12～14、Pit1：15～17、Pit2：18・19、Pit7：20、SD1：21～31]
 図 版 8 遺物写真〔調査区西端：32～39、遺構外・試掘：40～53〕
 図 版 9 遺物写真〔遺構外・試掘：54～76〕
 図 版 10 遺物写真〔遺構外・試掘：77～95〕
 図 版 11 遺物写真〔石器・石製品等：96～102、調査区出土石英（水晶）片：1～8、市教委調査区出土墨書き土器〕

[発掘調査日誌]

平成 23（2011）年

- 1月 7 日（火）計画準備
 1月 11 日（火）基準点測量、周辺に事前挨拶。
 1月 12 日（水）現場機材搬入。
 1月 13 日（木）表土剥ぎ、調査区整形。
 1月 14 日（金）調査区整形、包含層掘下げ。
 1月 17 日（月）包含層掘下げ。確認面精査、一部半截。
 1月 18 日（火）遺構掘下げ、実測。
 1月 19 日（水）遺構掘下げ、実測。
 1月 20 日（木）遺構掘下げ、実測。
 1月 21 日（金）遺構実測、写真測量、全景撮影。
 1月 24 日（月）遺物整理、機材撤収。
 1月 25 日（火）埋め戻し、機材撤収。
 1月 26 日（水）機材撤収、データ・遺物基礎整理。
 1月 27 日（木）データ・遺物基礎整理。
 1月 28 日（金）データ・遺物基礎整理。

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

山梨県は、山梨県牧丘町千野々宮地内において、農業基盤整備事業の一環である牧丘東部地区用排水路第12号の整備を計画した。事業主体となる山梨県岐東農務事務所は、山梨市教育委員会に埋蔵文化財の有無について照会した結果、計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地、薬師堂跡遺跡の範囲内であることが判明し、平成22年8月31日付で文化財保護法94条の通知が市教育委員会に提出された。市教育委員会は、同年9月1日に山梨県教育委員会へ進呈、同9月17日に県から試掘の旨回答があり、同9月28日に岐東農務事務所へ伝達した。

試掘調査は平成22年11月8日～19日に市教育委員会が実施した。対象地に4箇所の試掘坑を設定（第2図TPI-4）したところ、土坑・ピットの検出と土師器や繩文土器の出土が確認された。市教育委員会は、試掘調査の結果、遺構が検出される可能性があるとして、掘削を伴う水路改修部分については本調査の実施が必要と報告され、本調査の実施に至った。

本調査は、山梨市・山梨県岐東農務事務所・財團法人山梨文化財研究所と協定を締結した上で、発掘調査業務委託として岐東農務事務所と山梨文化財研究所が委託契約を締結し、平成23年1月7日～28日にかけて実施した。整理作業並びに本報告書の刊行業務については、平成23年4月に岐東農務事務所と山梨文化財研究所で委託契約を締結して事業にあたった。調査体制は以下のとおり。

調査体制

調査主体	財團法人山梨文化財研究所
調査担当者	望月秀和（財團法人山梨文化財研究所調査員）
発掘調査参加者	森田信一、武井美知子、筒井聰、保坂悌司
整理作業参加者	竜沢みち子、鶴原ゆかり
事務局	柳本千恵子、横田杏子

第2節 調査の経過

発掘調査業務は、平成23年1月11日より着手し、調査の事前準備として基準点の設置、周辺住民への調査実施についての周知を行った。調査機材の搬入は順次を行い、13日より重機による表土掘削を開始した。掘削の際は随時土層確認をしながら進め、17日までに包含層掘削と遺構確認面の精査を行った。21日には検出したすべての遺構を完掘して、ポール撮影による調査区全体の写真測量を実施した。遺構の観察記録と周辺調査、機材の撤収および重機による埋め戻し作業を25日までに行い、延べ14日間の発掘作業を終了した。

現場作業終了後、基礎整理として出土遺物の洗浄・分類、遺構・遺物データの整理・保管作業を実施し、あわせて調査概要報告書をまとめ、28日に市教育委員会へ提出して発掘調査業務完了となった。なお、市教委担当による調査進行状況及び掘削状況等の検査・確認は、表土掘削前と表土掘削完了後の段階を13日、包含層掘削完了後の段階を17日、遺構掘削完了後の段階を21日に実施して頂いた。

整理・報告業務については平成23年4月に業務契約を締結し、遺物の注記・実測図作成・写真撮影、遺構図の編集・図版作成、報告書原稿執筆・編集作業を順次実施した。平成24年3月に本報告書を刊行し、調査に係るすべての業務を終了した。なお、発見した遺物及び調査データは、山梨市教育委員会で保管される。

第3節 調査の方法

今回の発掘調査は、既存水路を取り壊し、新たな排水溝を設置する工事に伴って実施したものである。当初、市教育委員会より指示された調査範囲は、長さ約16m、幅約2mの水路の形状に沿った弓型の範囲（約32m²）を対象としていた。現地確認の際、対象地の大半が積み石と盛土によって構築された畠地境であることが判明した。さらに、試掘成果から推定する遺構確認面が地表面から40～60cmの深さであったことから、既存水路によって攪乱されていることが予想でき、遺存状況の悪さが懸念された。そこで、調査精度の向上と作業の効率化を図って市担当者と現地協議を行い、調査区を南側の水路の攪乱が及んでいない範囲まで拡張した細長いD字形とすることになり、調査範囲は東西約18m、最大幅約3.3m、約51mを測った。

調査の方法については、重機による表土掘削の後、人力によって包含層掘削、遺構確認、遺構掘下げと順次進めた。調査区の一部は調査終了後に烟地に運ぶことを考慮し、既存のU字溝と煙境の石積みの除去の際は、できる限り廃土と石材等の分別に努めた。また、厳寒期に実施した調査であったため、霜柱対策としてブルーシートを複数枚用いて、遺構面の養生に努めた。

調査記録については、遺構断面図の作成・基本層序および遺構埋土の観察記録・遺構深度の計測と、光波測量による平面図作成・遺物の3次元記録・簡易図化システムによる写真測量、およびポール撮影による写真測量（委託）を実施した。測量に用いた機器およびシステムは以下の通りである。

光波測量機器 /TOPCON GPS-III

コンピュータ /Panasonic TOUGHBOOK

取り上げ・図化システム /CUBIC 社製 遺構くん

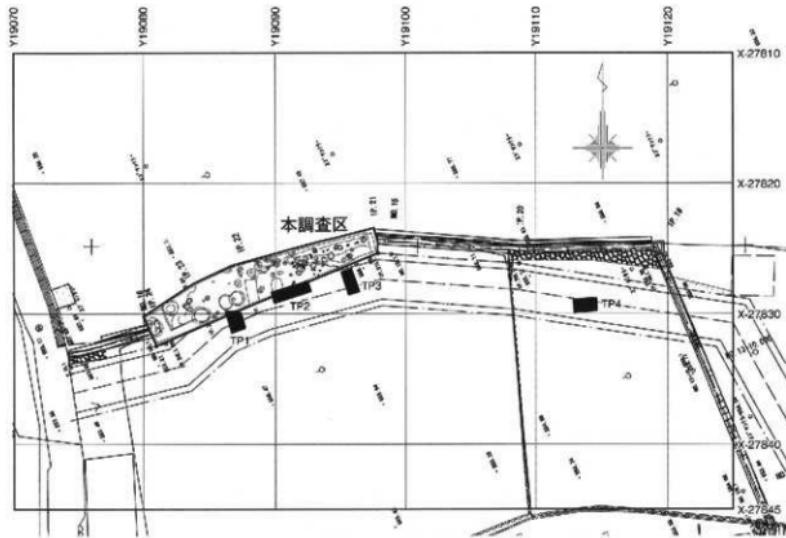
簡易図化システム（カメラ）

/Canon 50D +EF レンズ 20mm

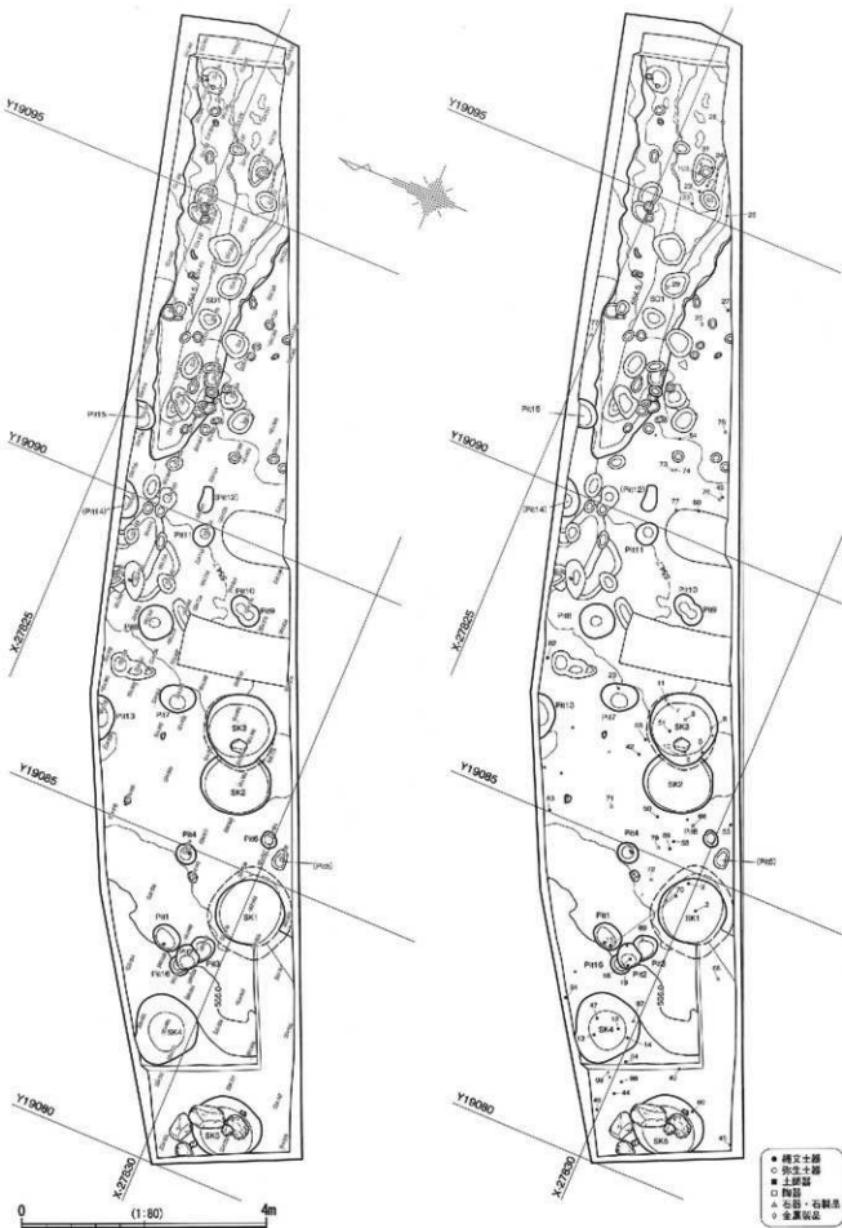
第4節 基本層序と確認面について

層序は、調査区の東西両端で観察した。基本層序については7層に分層し、調査区西壁セクション図（SK5断面図）に示した（第3図）。なお、現地の土地形状は西側が高く、南南東へ緩やかに下っており、調査区の東端と西端では約90cmの比高差がみられた。

第1図 対象地位置図



第2図 調査区配置図



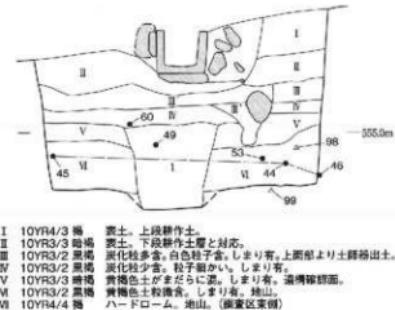
第3図 調査区全体図

I・II層は耕作土で、I層は切り土による盛土であった。III層は中世～近世段階の耕作層と考えられ、平坦面が調査区東まで続いている。遺物を少量包含した。IV層は遺物包含層で、上層からの耕作または排水路設置による影響なのか、縄文・弥生時代の土器片が混在した。

遺構確認面としたV層は、地表面からの深さ約50～80cmあたりの黄褐色土層で、調査区東側に行くにつれて薄くなっていく。地山とした黄褐色ローム層(VI層)までの深さは、調査区東端で地表下約50cmを測った。また、調査区西端ではVI層と遺構確認面としたV層との間に黒褐色土層(VI層)が入り、地山面までの深さは約120cmを測った。なお、VI層には、SK4・5周辺において縄文時代早期段階の土器片や水晶片が出土したため、調査区南壁際にサブトレーナーを設定し、SK1までの立ち割りを実施した。しかし遺構の存在を示すような層的な変化は確認できず、遺物が混在する再堆積層(自然堆積層)と判断した。

五

A 556.3m



第4図 基本層断面図

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

薬師堂遺跡は、山梨市牧丘町千野々宮地内に所在する。同市は、平成17(2005)年に山梨市・牧丘町・三富村が合併し、総面積は289.87km²となった。市域の北端は埼玉県・長野県との県境にあたり、東から古礼山(2,112m)、水晶山(2,158m)、雁坂峠(2,289m)、破風山(2,318m)、甲武信ヶ岳(2,475m)、国師ヶ岳(2,592m)、さらに朝日岳(2,579m)、鉄山(2,531m)、金峰山(2,599m)と峰を連ねる。市域の南側は甲府盆地北東端に面し、標高約310mの笛吹川流域に広がる低地帯となっている。遺跡が所在する牧丘町域は、井戸川・豊原・袖口といった山間より広がる小剣状地形が重なり合って形成された複合扇状地と、琴川や鼓川などの開析の影響を受けた緩急複雑な丘陵地・河岸段丘が発達した地域である。

山間地である同地域の開発要因であり、集落構成の特質となってきたのが、交通路と金峰山信仰である。本市域は、雁坂峠を越えて武藏へ繋がる秩父往還道や、中世武田氏が雁坂口へ抜ける秘密街道として開いたとされる秩父裏街道が通り、交通の要衝となってきた。金峰山は、文武天皇の戊戌年(698)に大和の金峰山より藤王権現を勧請した富士山と並ぶ甲斐国山岳信仰の拠点である。「甲斐国志」に記載される登拝道九口のうち、万力道・西保口・袖口道が本市域に開かれ、東口と称されていた。西保口・袖口道はともに秩父街道に面する蘆平から柳平間を結ぶ経路であるが、小橋山(1,713m)の西側を西保口、東側を袖口が通り、万力道は西保下で西保口ルートに合流している。西保口には、鼓川左岸の小田野山にある安田義定の要塞とする小田野城跡や古宿道上遺跡や曲田遺跡などが分布する。袖口道については、本遺跡や中牧神社のある琴川右岸の河岸段丘を通る。このルートには、金峰山山頂にある五丈岩(藤王権現)の山宮に対して里宮として甲府盆地各地の入山口に祀られた金桜神社が置かれている。

本遺跡周辺の地形については、比較的平坦で細長い傾斜地で現在は畠地や宅地として利用されている。調査区は県道210号袖口塩山線西側の畠地で、山梨市立牧丘第一小学校より北へ約400mのところに位置する果樹畠の畠地にあたり、さらに千野々宮と対応する字境にもなっている場所であった。調査区から北へ約800mのところには中牧神社があり、文明10(1478)年に築造された一間社流造の本殿が重要文化財に指定されている。同社は対岸・城古寺・袖口・千野々宮の総鎮守社であり、牧荘の中央に位置したことが社名の由来とされている。社記等では「千野々宮」が元の社名であるとし、「牧丘町誌」では六月晦に行う夏越の祭りに茅の輪轤りの祭事を行った格式の高い神社として、社名の由来を捉えている。



第5図 遺跡の位置

また、周辺には「寺屋敷」や「城古寺」など、寺院に関連した地名がみられる。千野々宮地内においては、「甲斐国志」や社記・寺記に江戸時代に中興開山された瑞竜山藏昌院、万葉山神光寺といった臨濟宗妙心寺派・惠林寺末の寺があったとしている。平成元(1994)年に刊行された『牧丘町の文化財』では、両寺ともに廃寺で、現在藏昌院は石塔を2・3基を残すのみ、神光寺についても墓地のみが残るとしている。遺跡名及び小字名の「薬師堂」についての由来は定かではないが、千野々宮地内には薬師如来立像を祀る御堂と六地蔵石幢が存在している。これらは現在、「精進屋敷」の由来となった精進家の敷地に「屋敷神」として祀られているものである。元は別の場所にあったものを移設してきたものらしく、同家では年に一度、御堂で酒宴をしていた事以外に詳細は伝わっていない。六地蔵についても、円柱の輪身に宝永五年の銘があるが、笠・中台は四面で、龕部と石材も異なっているため、年代は明確ではない。

第2節 歴史的環境

山梨市では現在、旧石器時代～近世の埋蔵文化財包蔵地として、311遺跡が周知されている。第1表および第6図では、本遺跡を中心に旧石器から近世までの74遺跡の位置を示した。(註)

薬師堂遺跡が所在する牧丘町千野々宮には、千野々宮遺跡と称された遺跡が『牧丘町誌』(以下、町誌)にあげられている。現在、その範囲は明確ではないが、千野々宮地内には牧ノ前遺跡、大久保遺跡、精進屋敷遺跡等が周知されており、本遺跡とともに縄文時代または平安時代の遺跡として知られてきた。周辺における発掘調査の報告例は少なく、倉科字勝崩に所在する曲田遺跡(85)、同じく倉科字丸山に所在する奥豊原遺跡(43)、西保中字古宿に所在する古宿道上遺跡などが町誌や『山梨県史』等で報告されている。以下、各時代ごとの歴史的環境について、遺跡分布と調査事例を中心まとめておく。

旧石器・縄文時代　旧石器時代については遺跡数がは少なく、近年発掘調査の事例はないが、旧石器末繩石刃時代の石核が発見されたとする井戸川遺跡(38)や、鉛の宮遺跡(53)・上野田東遺跡(58)などがあり、本遺跡の西側で分布が確認されている。縄文時代早期になると、井戸川遺跡・鉛の宮遺跡に加え、奥豊原遺跡・東大庭遺跡(63)、町誌に掲載されている須川道上遺跡等において押型文土器が出土しており、県内では古くからの遺跡が確認できる地域のひとつとして知られている。

発掘調査が実施された奥豊原遺跡では、早期段階の堅穴住居跡、炉穴、土坑などが検出されている。本報告が未刊のため詳細は不明であるが、住居跡からは三式の沈線文土器と白石・水晶・黒曜石製の石器や水晶製スクレイバーなどが発見されている。また、水晶に関しては乙女高原の所産と推定し、製品のはかに水

第1表 周辺遺跡一覧

遺跡名	場所	年代	遺跡名	場所	時代
02066 室町中期　高尾山遺跡	高尾山、高尾	中世	05043 船高山遺跡	歌斐作、高尾・中村、下條・中世	
02019 朝天山遺跡	御坂山、高尾		05044 中条山遺跡	歌斐作、高尾・中世	
02019 佐久波山遺跡	佐久波山、高尾・中世		05045 太平洋遺跡	歌斐作、高尾・中條・平安	
02020 佐久波山遺跡	佐久波山、高尾		05046 高山山遺跡	歌斐作、高尾	
02021 上野田東遺跡	上野田東、中條・近世		05047 八木山遺跡	歌斐作、高尾	
02022 八木山遺跡	八木山、高尾・近世		05048 ニワガタ遺跡	歌斐作、高尾・中條・近世	
02023 佐久波山遺跡	佐久波山、高尾・中世		05049 佐久波山遺跡	佐久波山、高尾・中條・近世	
02024 中條山遺跡	中條山、高尾・近世		05050 佐久山遺跡	佐久山、高尾・中條・近世	
02025 佐久波山遺跡	佐久波山、高尾・中條・近世		05051 山田山遺跡	佐久山、高尾・中條・近世	
02026 佐久第7号遺跡	佐久第7号、高尾・土塙・高尾・千賀・近世		05052 琴引の山遺跡	佐久山・高尾・中條	
02027 波賀山遺跡	波賀山、高尾・中條・近世		05053 氷川山遺跡	氷川山、高尾・中條・近世	
02028 北北端遺跡	北北端、高尾・中條・近世		05054 人石遺跡	歌斐作、高尾	
02029 下木戸遺跡	下木戸、高尾・中條・近世		05055 上野田遺跡	上野田、高尾・中條・近世	
02030 朝天山遺跡	朝天山、高尾		05056 佐布田遺跡	佐布田、高尾・中條・近世	
02031 高中尾遺跡	高中尾、高尾・中條・近世		05057 佐布田遺跡	佐布田、高尾・中條	
02032 西高尾遺跡	西高尾、高尾・中條・近世		05058 上野田東遺跡	上野田東、高尾・中條・近世	
02033 木戸遺跡	木戸、高尾・中條・近世		05059 山里山遺跡	山里山、高尾・平安	
02034 佐久第2号遺跡	佐久第2号、高尾・中條		05060 有根原山遺跡	有根原山、中條	
02035 佐久第3号遺跡	佐久第3号、高尾・中條・近世		05061 佐世作山遺跡	佐世作山、高尾・中條・近世	
02036 箱下山遺跡	箱下山、高尾		05062 佐世作山遺跡	佐世作山、高尾・中條・近世	
02037 有坂山遺跡	有坂山、高尾・中條・近世		05063 佐野山遺跡	佐野山、中條	
02038 井戸川遺跡	井戸川、高尾・中條・近世		05064 小山山遺跡	小山山、高尾・中條	
02039 市谷山遺跡	市谷山、高尾・中條・近世		05065 斎原山遺跡	斎原山、高尾・中條	
02040 朝天山遺跡	朝天山、高尾・中條		05066 朝天山遺跡	朝天山、高尾・中條	
02041 佐久波山遺跡	佐久波山、高尾・中條		05067 大久保遺跡	大久保、高尾・中條	
02042 朝千石遺跡	朝千石、高尾		05068 朝千石遺跡	朝千石、高尾・中條	
			05069 朝千石遺跡	朝千石、高尾・中條	

(注)
本表の遺跡名は埋蔵文化財包蔵地一覧表(山梨市教育委員会2011)のままでとした。
なお、第6図では収行程の遺跡は、遺跡名の(50)を省略して表したものでご留意願いたい。

品の原石や剥片が多数出土したことから、甲府盆地周辺の集落へ製品または材として供給した、水晶加工・中繼集落と推定して報告されている。

同地域において明確な居住の痕跡として確認されるのは縄文時代前期からで、曲田遺跡で諸磯c式段階の遺物を伴った竪穴状遺構3基が検出されている。縄文時代中期になると、堀ノ内遺跡において耕作中に石匂いの中から遺物が発見されたことが町誌に記載されている。そのほか、古宿道上遺跡では縄文時代中期末の石開炉と一部敷石を残した1号敷石住居跡、後期初頭で柄鏡形を呈す炉を交点にT字形に敷石が配置された2号敷石住居跡が検出されている。発掘調査の報告例は少ないものの、同地域では縄文時代の遺跡の分布



第6図 周辺の遺跡

が最も広範囲にわたっている。

弥生・古墳時代 弥生時代の遺跡は、前段階よりも遺跡数が大幅に減少するが、西部下丸山遺跡（26）や高野遺跡（30）、本遺跡を含む合字科真智から室平にかけての流の沢遺跡（52）・鈴の宮遺跡・上野田遺跡（55）・林組遺跡（57）・階遺跡（62）などが周知されている。発掘調査の事例も少なく、集落遺構もまだ確認されていないが、河川流域近くの平坦地に遺物が分布する状況が看取できる。

古墳時代については西部下丸山遺跡・鈴の宮遺跡・上野田遺跡・曲出遺跡があげられる。周知される遺跡は少ないが、曲出遺跡においては古墳時代前期の住居跡13軒が確認されている。なお、住居跡の特徴として、周囲を土手状に掘んだ貯蔵穴を伴い、ほとんどが焼失住居であったと報告されている。遺物については、台付甕・器台・壺・埴等の他、紡錘車や高壺・底部穿孔の小形壺などが出土している。

奈良・平安時代 調査事例では、曲出遺跡で平安時代末の住居跡10軒が確認されている。特徴として住居間に竈、その対角線上または長軸方向の壁面中間点に貯蔵穴を有し、柱穴4本をもつ点があげられている。また、籠羽口や鉄滓、住居中央に楕円形の範囲で焼土が確認されており、同地域で鍛冶行為が行われた証左として重要な成果となっている。その他、古宿道上遺跡で竈1基、奥豊原遺跡でも土師器が出土している。

文献史料から、甲斐国は東海道に属し、山梨・八代・巨摩・都留の4郡に分けられていたことがわかる。牧丘町は山梨郡加美郷にあたり、その初見は正倉院宝物の「調庸白絶金青袋」の墨書き銘「甲斐國山梨郡可美里日下」である。これは甲斐国にみられる郡名の初見でもあり、和銅七（715）年には既にカミと呼称する地域が存在していたことがわかる。郷城は現在の山梨市八幡・日下部を中心に、後述する牧庄を含む範囲と推定されている。遺跡分布をみても绳文時代に次ぐ広範囲となっており、律令制および金峰山信仰の盛行に伴って山間地に開拓が入ってきたことが窺える。

中世・近世 平安時代末から鎌倉時代初頭に活躍した安田義定の拠点のひとつが牧莊である。義定は清和源氏源義清の四男といわれ、治承四（1180）年の平家追討の際に、甲斐源氏の棟梁武田信義とともに挙兵の中心になった人物である。要害とした小出野城跡（84）付近には、西御所館跡や亥申屋敷、大門前、木戸口、射場、金屋敷などの地名が残る。「牧丘」の由来となった同荘名は、義定が開基した甲州市藤木の放光寺梵鐘銘「甲斐國牧莊放光寺 建久二年辛亥八月廿七日 從五位下遠江守源朝臣義定」が初見とされている。この梵鐘は貞治5（1366）年の作であるが、旧鐘の銘「建久二（1191）年」が移されており、同荘は少なくとも12世紀後半には成立していたと考えられている。荘域については荘内にあったとする寺社の分布から、山梨市八幡地区以北の甲州市松里地区から牧丘町を含む笛吹川上流一帯とされ、また別称として高橋荘とも呼ばれていたことから、一時期には竹森方面も荘域であったと推定される。さらに、甲斐市吉沢の羅漢寺蔵木造阿弥陀如来坐像の応永三十九（1423）年像底銘には「甲州御牧莊天台山羅漢寺」とあり、「御牧莊」が同荘を表すのであれば甲斐市北東部・甲府市北部から鶏冠山麓に至る広大な範囲であった可能性が指摘されている。

建久5（1194）年に義定が源頼朝により処刑された後の同荘は、「鎌倉大草紙」に征伐を命ぜられた加藤景庭に地頭職が与えられたとあるが、鎌倉時代末期に二階堂道蘿が登場するまでの状況は明確ではない。嘉元三（1303）年に「牧莊主」が懇請して夢窓疎石を招き、淨居寺が開創された。牧莊主の実名は記されていないが、疎石は元徳2（1330）年に道蘿の要請によって再度甲斐国に戻り、惠林寺を創建していることから、道蘿もしくはその父が「莊主」であり、同荘を支配していたことが推定されている。その後、同荘内では武田信昌の頃に守護代跡部氏が小出野城跡を要害とし、武田信玄の頃には淨居寺を窪平に移転して再興したとする中牧城（中牧城跡遺跡：82）がある。その他、武田氏の頃は軍事上攻防の秘密道路、江戸時代には幕府御用林保護のための旧秩父裏街道の要所として赤芝集落に置かれた鍵懸闇跡（88）や、30を超える魔守があつたことなど、伝承が多く残っている。

参考文献

- 牧丘町 1980 「牧丘町誌」 牧丘町総編纂委員会
牧丘町文化財審議会 1988 「牧丘町の文化財」 牧丘町教育委員会
山梨市教育委員会 2011 「山梨市市内遺跡発掘調査報告書 2010」 山梨市教育委員会
小野正文・信藤祐仁 1999 「甲斐の碑形土上器」 [丘陵] 第6号 甲斐丘陵考古学研究会
山梨県 1989 「山梨県史」 資料編1 原始・古代・考古 (遠路) 山梨県史編さん委員会
秋山敏 2003 「甲斐の荘園」 甲斐新書3 甲斐新書刊行会

第3章 発見した遺構と遺物

今回の調査では、土坑、ピット、溝状遺構を検出し、縄文・弥生・古墳・平安・中世・近世の遺物がプラスチックコンテナ（34×44×15cm）2箱出土し、総量約6kgを測った。遺構年代については、時期を断定できる資料の出土は少なく、いずれも小片であったため、ここでは検出状況から推定しておくこととする。

第1節 土坑（SK：第7図／第10図）

SK 1 [規模] 径110cm、確認面からの深さ92cm。[平面形態] 円形。[出土遺物] 縄文時代早期の土器片〔1〕、縄文時代前期の土器片〔2・3〕が覆土中より出土した。[特記] 断面は袋状を呈す。底面はほぼ平坦で、面積的には入り口部よりもやや広い。また、圓化した遺物以外にも多数土器片が出土したが、いずれも小片で接合するものはほとんどなく、すべて覆土中からの出土であった。覆土は暗褐色土でしまりが弱く、底まではほとんど変化がみられない堆積状況であった。遺物は堆積状況などから埋没した土壤に混在していたものと考えるが、上面と覆土内部では若干の時期差がみられ、確認面で検出した土器片とPit1 覆土中で出土した土器片が接合している。

SK 2 [規模] 長径114cm、短径108cm、確認面からの深さ27cm。[平面形態] ほぼ円形。[出土遺物] 圓化遺物なし。縄文土器、弥生土器、土器部壊片の小片が出土している。[特記] 平面規模は他の土坑と大差はなかったが、確認面からの深さは最も浅く、底面は平坦であった。SK 3と重複したが、遺物・断面観察ともに明確ではなく、遺構年代は断定できなかった。

SK 3 [規模] 長径120cm、短径111cm、確認面からの深さ69cm。[平面形態] ほぼ円形。[出土遺物] 縄文時代早期の土器片〔5〕、縄文時代中期頃の土器片〔6・7〕、弥生時代の土器片〔8～11〕が覆土中より出土した。[特記] SK 2と重複。上記のとおり、重複関係は不明。SK 1ほどではないが、西側がやや袋状に掘り込まれており、底面は平坦であった。内部には約25cm大の礫が1つ混在したが、使用痕等は確認できなかった。覆土中および土坑周辺で弥生時代の遺物が出土した状況から、弥生時代以降と比定しておく。

SK 4 [規模] 長径118cm、短径105cm、確認面からの深さ37cm。[平面形態] 不整円形（楕円形か）。[出土遺物] 縄文時代早期末から前期の土器片〔12～14〕、黒曜石〔97〕が出土した。[特記] 確認面では、上部からの搅乱の影響もあって西側のプランが不鮮明であった。完壊の形状は不整形となったが、断面観察による堆積状況の確認と遺物の出土状況から、土坑と判断した。覆土は2分層でき、土層観察から1層は縄文時代前期の遺物を含む遺構覆土、2層は掘り方もしくは地山直上であり、縄文時代早期段階の遺物が下層（地山層）に混在している状況が窺えた。

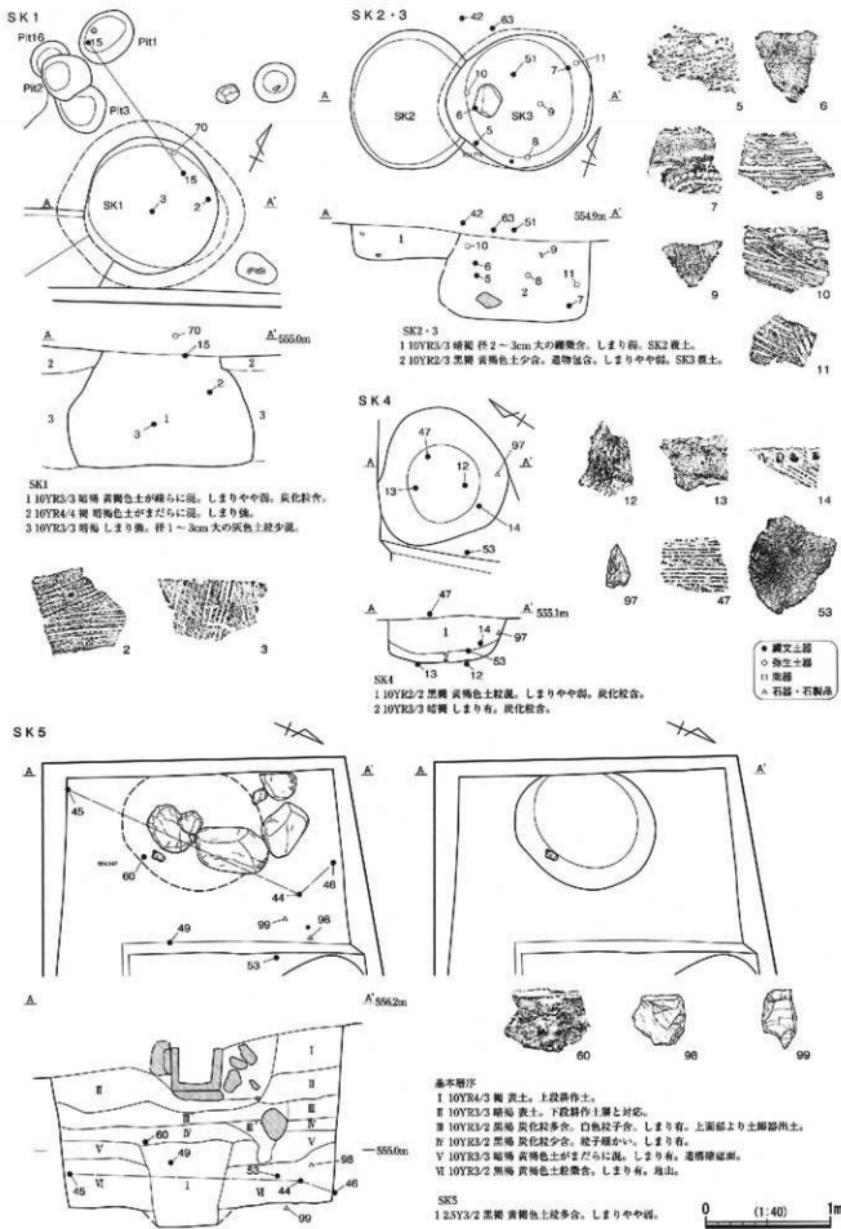
SK 5 [規模] 調査区西壁と底部からの推定であるが、長径118cm、短径100cm、確認面からの深さは75cmを測った。[平面形態] 円形か。[出土遺物] 圓化遺物なし。[特記] 調査区西端に設定したサブトレにより、調査区西壁の断面で確認した遺構である。サブトレは水路と石積みの搅乱のため遺存状況が悪く、またVI層のために確認面と地山が明確でなかったことから設定したもので、遺物はトレンチ内一括で取上げた。

本遺構の上部からは、約40～60cm大の礫が弧状に並んだ状態で確認され、礫周辺の精査にも努めたが、遺構プランを捉える事はできなかった。掘削後の断面観察から、礫は畑地の石積みの石材の一部であり、直接下部の土坑に伴うものではなかったことが判明した。

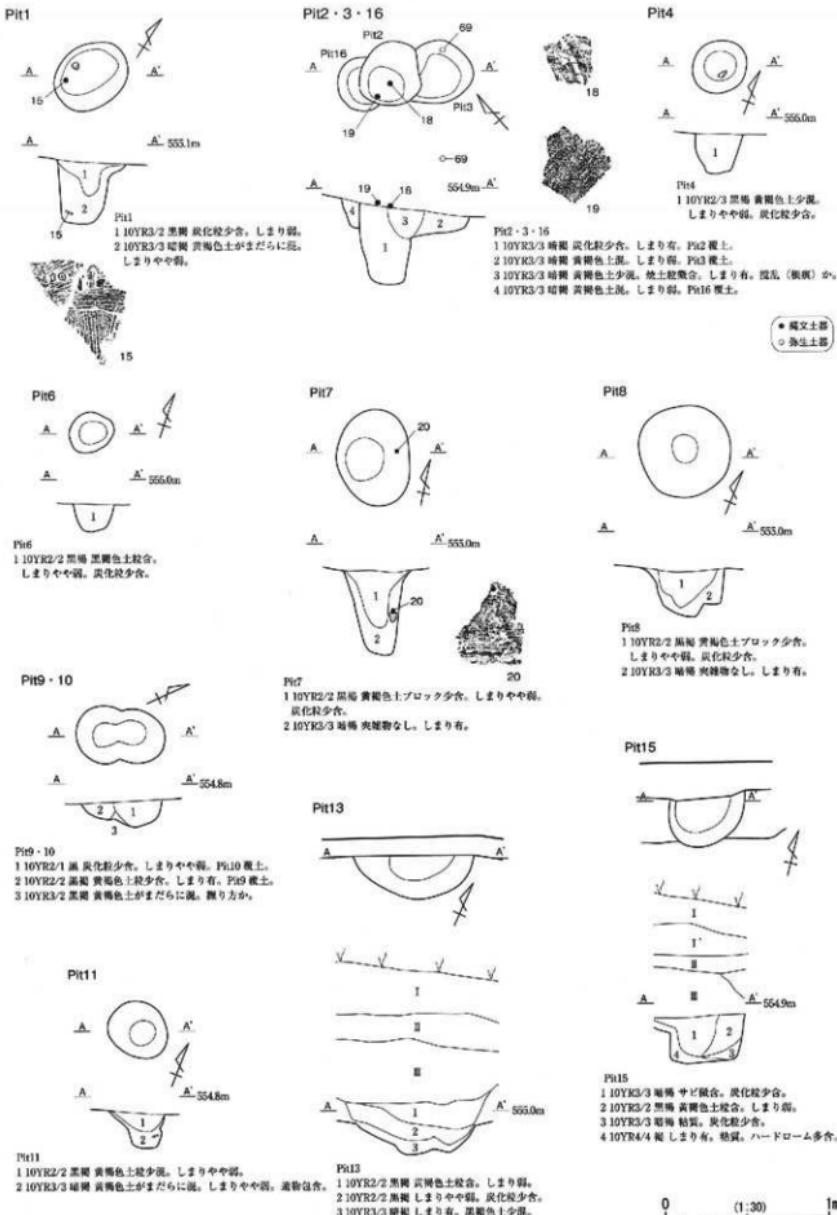
遺物については、本遺構付近で五領ヶ台式の土器片〔33～36〕の出土がみられたが、上記の通りサブトレ一括で取り上げており、出土位置が明確ではないことから、調査区西端〔32～39〕として掲載した。

第2節 ピット（Pit：第7図／第10図）

13基を確認した。確認面を精査した段階でPit1～16まで付番したが、完掘した結果Pit5・12・14は上部からの搅乱と判断し、欠番とした。今回の調査区は範囲狭小であったが、柱痕や礎板石等の建物等を推定する痕跡も検出できなかった。遺物はPit1～3・7・8・10・11から出土したが、いずれも小片であった。Pit1から出土した〔15〕は、今回の調査区内で唯一接合関係が確認された遺物であり、SK 1上面および調査区西端から出土した破片と接合した。その他、規模・平面形状・深さ等については、表2にまとめた。



第7図 遺構図(土坑)



第8図 遺構図(ピット)

第3節 溝状遺構（SD1：第9図／第11図）

〔規模〕東西方向の溝を確認した。確認範囲では長さ約7m、幅およそ1.2～1.6m、確認面からの深さは20cmを測ったが、調査区西側および遺構上部の大半は石積みと排水路に重複して壊されていた。調査区中央から東側にかけては、本遺構と既存水路の軸が若干異なったため搅乱による掘削が浅く、覆土および遺物の遺存状況は比較的良好であった。〔出土遺物〕繩文土器〔21～24〕、弥生土器〔25〕平安時代の土師器〔26・27〕、近世陶器〔28～30〕、古銭〔31〕などが出土した。なお、繩文土器や弥生土器の出土もあったが、他地点の遺物と比べて表面の摩耗が著しいため、流れ込みによるものと思われる。

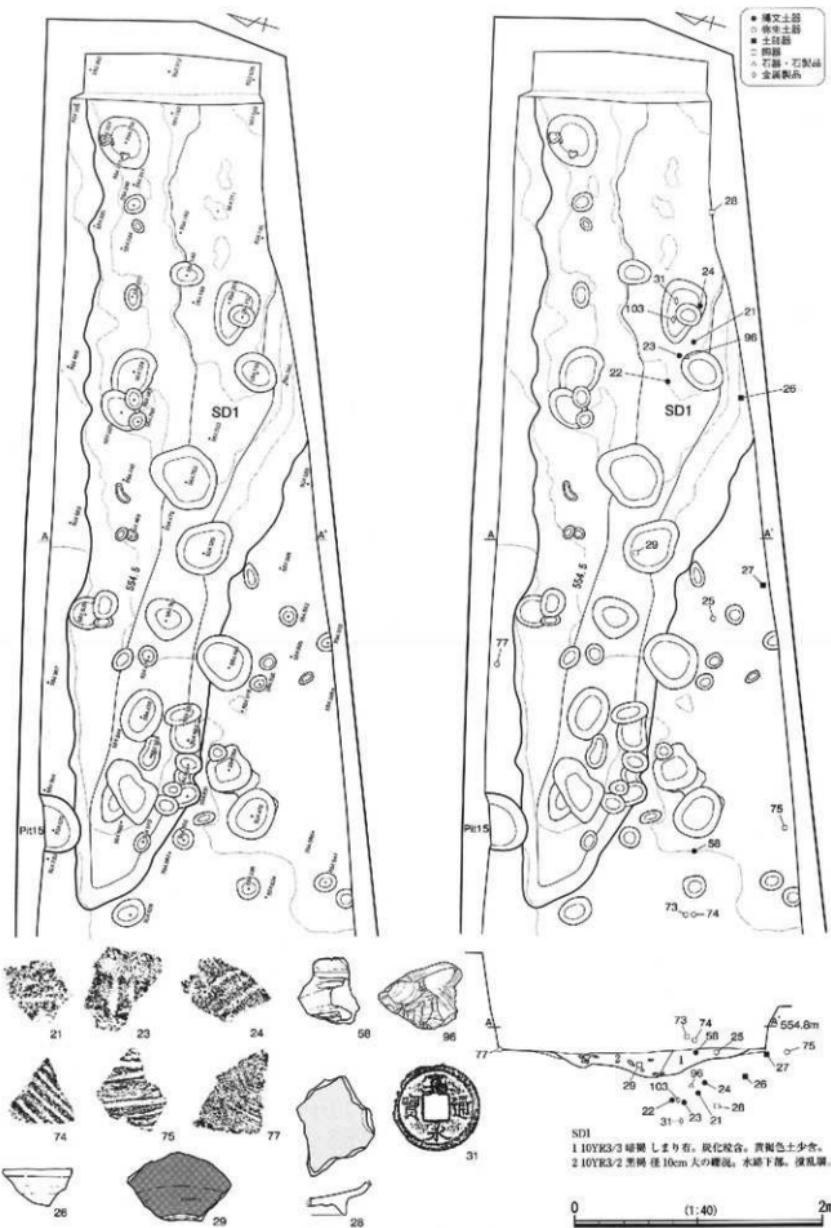
〔特記〕遺構年代については甲斐型土器坏・羽釜片と近世陶器・寛永通宝の出土から、平安時代と近世以降の年代が推定される。本遺構は、東西方向に延びる溝状遺構で窪平と千野々宮の字境にあたるが、上部は既存の排水路と畠地境の石積みで壊され、明確ではない。

覆土の断面観察では、排水路設置に伴う搅乱以外に、平安時代の遺物が混在する黒褐色土層が確認できた。同層については、周辺での聞き取りから、今回の調査区がかつては「沢」と呼ばれる「水が流れていた場所」を埋め立てたことがわかり、その一部にあたっていたものと考えられる。沢の方向についてはやや不明確であるが、この状況から遺構の性格を推定すると、水路として耕作地への利水や排水、または地境溝などの用途が考えられる。

年代については、出土遺物から古代と近世の別遺構が重複している可能性もあり、搅乱の影響や限られた範囲での調査だったため、判然としない。但し、今回の調査で出土した平安時代の遺物の多くが同遺構周辺と、その延長線上に位置する試掘坑（TP4）で検出しておらず、またコンタに沿う方向で東西に伸びている状況から、地境として古代まで遡る人為的に造られた溝の可能性も考えられる。

第2表 遺構一覧

遺構名	調査区内 遺構位置			出土遺物 (発掘番号)	遺構推定年代	備考
	長径	短径	深さ			
Pit1	西側	48	34	43	15～17	繩文時代前期（諸磯c式古段階）か
Pit2	西側	34	36	50	18・19	-
Pit3	西側	38	-	13	-	-
Pit4	西側	35	31	28	-	-
(Pit5)	西側	-	-	-	-	欠番とした
Pit6	西側	28	25	19	-	-
Pit7	中央	58	45	58	20	繩文時代前期（諸磯c式古段階）か
Pit8	中央	58	57	46	小片のため未図化	-
Pit9	中央	36	-	19	-	-
Pit10	中央	32	-	23	小片のため未図化	-
Pit11	中央	39	33	24	小片のため未図化	-
(Pit12)	中央	-	-	-	-	欠番とした
Pit13	西側	74	-	19	-	-
(Pit14)	中央	-	-	-	-	欠番とした
Pit15	東側	45	-	23	-	-
Pit16	西側	33	-	20	-	-
SK1	西側	110	110	92	1～4	繩文時代前期頃
SK2	中央	114	108	27	小片のため未図化	-
SK3	中央	120	111	69	5～11	弥生時代か
SK4	西側	118	105	37	12～14	繩文時代前期（諸磯c式古段階）か
SK5	西側	118	100	75	(サブトレー括か)	-
SD1	東側	-	-	-	21～31	平安時代（10世紀）～近世か



第9図 遺構図(溝状遺構)

第4節 出土遺物について

今回の調査では、縄文時代早期末から近世にかけての遺物が出土した。いずれも小片であるが、ここでは時代ごとに種類と型式、調整痕やその特徴、分布状況について述べておく。

縄文時代

早期末～前期初頭 [1・5・12・18・19・21・32・40・41～46]

いずれも小片であるが、胎土に纖維を含む粗い胎土のもの〔1・5・18・21〕、鋸歯状の貝殻腹縁文がみられる押越式〔40〕、口縁部および断面三角形の隆帯にヘラ状工具で刻目を施した神之木台式〔41〕があげられる。この他、早期の遺物としては、折り返し状の口縁で条痕文とヘラ状工具による刻目が施され、補修孔が穿たれた〔32〕や、細かく浅い縄文がみられる〔19〕、前期初頭で東海系の中越式と思われる〔43〕などが出土した。土坑や溝から出土した遺物は、ほとんどが小片で覆土中に混在していたものであり、遺構外や遺構の掘り方からの出土が主であった。調査状況から、調査区の大半が同段階の遺物が混在する再堆積層であったことが考えられる。また、早期末の土器とともに水晶片が伴出したことも、同地域・同時期の特徴の一つとしてあげられる。その他、無文であるが内外面に工具や指ナデがみられるもの〔44～45〕が出土した。これらは接合はしないが、胎土観察から同一個体と考えられる。なお、調整痕から平安時代末の土器師壺である可能性も考えたが、層序からこの段階の遺物と判断し、報告しておく。

前期 [2～4・14～17・20・47～50・47～52]

前期段階では、諸磲b新段階〔2・47～50〕、諸磲c古段階〔14～16・51・52〕の遺物が出土した。諸磲b新段階とした〔2・47～50〕は、縄文地文で半截竹管による平行沈線が施されている。諸磲c古段階とした〔14～16・51・52〕は、半截竹管による集合沈線文やボタン状貼付文が施されている。小片であったが、SK1、Pit1からの出土がみられた。

中期 [6・7・22～24・34～37・55～62]

中期では集合沈線文や結節縄文が施された五領ヶ台式〔22・33～36・54～58〕、角押文の貉沢式〔6・7・59〕、水蛭把手の曾利式〔61〕、崩消縄文の加曾利E式〔62〕などが出土した。

五領ヶ台式については本調査現場においても、他の上器に比べて胎土に薔薇を多く含むことが特徴として捉えられた。文様は口頭部文様帶に半截竹管による沈線で簡略した山形文がみられる〔33〕、粗い沈線文が施されている〔34・35・55〕などは、集合沈線文系列の崩れた段階と位置づけられる。その他、縄文地文に半截竹管による沈線がみられる〔22〕、結節縄文が施された〔33〕、縄文地文で半截竹管による刺突文と口縁部に刻目がつく〔56〕、三角形状工具による刺突から左右と下に沈線を施した〔57〕、沈線と隆帯が施された口縁部の突起〔58〕などがある。貉沢式は約2-3.5mmと幅狭の角押文がある〔6・7〕と、約7mm幅の角押文が施された〔59〕がある。遺構に伴って出土したものは少なかったが、周辺に遺構が存在する可能性は窺える。

後・晚期 [63・64]

縄文時代後期では、器厚が約7mmと薄く、縱の沈線がみられる63の1点を図化した。この時期の遺物は相対的にも微量であるが、周辺遺跡においては敷石住居跡が検出されていることから、調査区周辺でも遺構が存在する可能性を示すものと考えられる。また、縄文時代晩期もしくは弥生時代前期頃に比定する〔64〕は、波状の口縁部に縄文と内外面にミガキが施されている。

その他、縄文時代の遺物としては、小片で半面が剥離し、摩耗が著しい土製品〔65〕が出土した。胎土観察では縄文土器に類似しており、形状・用途については不明であるが、指頭による整形の痕がみられた。

弥生時代 [8～11・25・38・66～79]

今回出土した条痕文がみられる遺物は、すべて貝殻腹縁によるものではなく、概またはヘラ状の木製工具によるものであった。条痕文は外側だけでなく、内面にみられるもの〔38・71〕もあった。調査区全体に散在する状況であったが、SK3およびその周辺からは、ある程度まとまった出土が確認された。時期的には弥生時代中期頃に比定するものが多くみられた。その他、表面の磨耗が著しいが、東海東部・相模地域の系統とみられる〔66〕が出土した。

古墳時代 [80・81]

S字状口縁台付壺と思われる薄手の土器片 [80・81] の他、古墳時代前期頃の遺物が数点確認された。
平安時代 [26・27・39・82～91]

同時代に比定する出土遺物のうち、最も古い段階に位置づけられるのが82で、外面をヘラ削り調整された壺または鉢の底部と思われる。83の皿は、内面に暗文、底部はヘラ削り調整されており、9世紀後半代に位置づけられる。その他、10世紀代の遺物として土師器壺 [26・84・85]、壺 [87・88]、羽釜 [27]、竈形土器 [89]、柱状高台 [86] 等出土した。26・84は壺の口縁部で、ややS字縁状になっており、84には灯明痕がみられた。85の壺は外面を回転ヘラ削り調整し、わずかに残る底部に糸切痕がみられた。

87・88は壺口縁部で、外面には指頭痕・指ナデと縱方向のハケメ、内面には横方向のハケメがみられる。27は羽釜の体部から剥がれた羽部分である。89は竈形土器の口縁部で、内面に折り返しと指頭痕・横方向のハケメ、外面はナデと縱方向のハケメ調整されており、内面は被熱により変色している。86は上部が欠損しており判別は難しいが、11世紀代に位置づけられる柱状高台の壺または皿と思われる。底部は回転糸切痕の他、多数の擦痕がみられ、何らかの転用の痕跡と考えられる。

主にSD1およびSD1搅乱部分(既存排水溝設置時の搅乱)、試掘トレンチ(TP4)から出土した。

中世 [90・91]

調査区上層の耕作土から、無釉の擂鉢 [90]、土師質土器壺 [91] が出土した。壺は、法量や体部が直線的に立ち上がる器形を呈している。県内における類似資料では、南アルプス市大師東丹保遺跡II・III区出土の13世紀中頃～14世紀初頭に位置づけられるロクロ整形のものや、甲州市勝沼町岩崎氏館跡出土資料などが比較検討の対象にあげられる。しかし、本資料はこれらとも特徴を異にしており、1点のみが遺構外から单独で出土したため、年代的位置づけが困難である。この点についても、今後の検討課題としておきたい。

近世～近代 [28～31・92～95]

小片のため、產地・年代等の特定は難しいが、陶器 [28～30・92～94]、磁器 [95]、と古銭 [95] の出土を確認している。28は灰釉で高台内部のみ無釉であり、菊花皿状に口縁部が渋曲するものと思われる。29は内外面、97は口縁部とそれ以外で2種の釉薬が用いられている。30は外面のみ施釉されている。その他、天日茶碗片 [92] や染付の一輪挿し、蛸唐草が絵付された [95] などが出土している。

火半が表層の耕作土や搅乱中に混在したものであったが、SD1から陶器と古銭(寛永通宝)が出土しており、同遺構が近世においても畑地境、または字境とされていた可能性を示す資料といえる。

石器・石製品 [96～102]

今回の調査では、明確に石器と判断できるものは少なく、黒曜石製のスクレイパー [96] と石鎌 [97] が出土した。スクレイパーは、刃先が著しく摩耗しており、使用の痕跡として認められる。その他、水晶(石英)に加工痕がみられた [98]、石錐状の [99]、石斧の一部と思われる [100]、近世・近代のものと思われる砥石 [101] や石筆 [102] が出土した。このほか、今回の調査区からは水晶(石英)片8点が出土しており、岡化はしなかったが写真(図版11)および觀察表に掲載した。周辺には水晶の產地として、小檜山南腹の水晶窓や透明度の高い乙女坂鉱山が知られており、今回出土した遺物についても非常に透明度が高く、針状包有物が確認されるものが含まれている。第5章で後述するが、本遺跡や同地域の特徴を示す資料といえる。

参考文献

小林達雄 編著 2008 『能登純文土器』

小野正義 1986 「飛鳥奈」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第17集 山梨県教育委員会

小野正義 1987 「帆立貝」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第21集 山梨県教育委員会

山梨県 1989 「山梨県史 資料編I 原始・古代1考古(遺跡)」 山梨県史編纂さん委員会

山梨県 1999 「山梨県史 資料編2 古代・古事記(遺跡・遺物)」 山梨県史編纂さん委員会

高野正明 1991 「県道堆半～深平鐵筋橋工事に先立つ牧丘町曲田遺跡調査報告書」「研究紀要11」 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

石神孝了 2007 「山梨県内中性寺院分室調査報告書」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第260集 山梨県教育委員会

佐々木謙 2008 「山梨における中世青白器の様相」「山梨考古論叢V」 山梨県考古学協会 25周年記念論文集 山梨県考古学協会

小林雄二 1997 「人跡東丹保遺跡II・III区」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第132集 山梨県教育委員会

(第5章)

磯貝正義 1978 「古代官牧制の研究」「郡司及び采女制度の研究」 古川弘文館

第3表 出土遺物観察表（土器・陶磁器類）

器種番号	器種番号	土器文様	種類	文様・装飾部	色調	断面・内外形	法面 (cm)			法面番号	参考
							口径	底径	高さ		
第10回 1	SK1	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子・表面	-	-	MテクSK1	56	
第10回 2	SK1	縞文土器	深鉢	縞文土器	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子・表面	-	-	MテクSK1	58	
第10回 3	SK1	縞文土器	深鉢	赤褐色土器による平行底鉢	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子・表面	-	-	MテクSK1	34	
第10回 4	SK2	縞文土器	深鉢	赤褐色土器による平行底鉢	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子・表面	-	-	MテクSK1	37	
第10回 5	SK3	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子・表面	-	-	MテクSK1	58	
第10回 6	SK3	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子・表面	-	-	MテクSK1	40	
第10回 7	SK3	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子・表面	-	-	MテクSK1	42	
第10回 8	SK3	縞文土器	深鉢	赤褐色土器による多条文 内面ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSK1	39	
第10回 9	SK3	縞文土器	深鉢	木工痕による多条文 内面ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSK1	41	
第10回 10	SK3	縞文土器	深鉢	木工痕による多条文 内面ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSK1	42	
第10回 11	SK3	縞文土器	深鉢	木工痕による多条文 内面ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSK1	44	
第10回 12	SK4	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSK1	47	
第10回 13	SK4	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSK1	48	
第10回 14	SK4	縞文土器	深鉢	木工痕による平行底鉢	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSK1	45	
第10回 15	P11	縞文土器	深鉢	赤褐色土器による平行底鉢	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクP11	16	
第10回 16	P11	縞文土器	深鉢	赤褐色土器による平行底鉢	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクP11	48	
第10回 17	P11	縞文土器	深鉢	赤褐色土器による平行底鉢	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクP11	59	
第10回 18	P12	縞文土器	深鉢	内面ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクP12	61	
第10回 19	P12	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクP12	62	
第10回 20	P7	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクP7	63	
第11回 21	SD1	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	53	
第11回 22	SD1	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	48	
第11回 23	SD1	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	49	復元難しい
第11回 24	SD1	縞文土器	深鉢	縞文	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	52	復元難しい
第11回 25	SD1	縞文土器	深鉢	木工痕による多条文	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	55	
第11回 26	SD1	土器	茶	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	54	玉筋口縁
第11回 27	SD1	土器	茶	ナメ	赤褐色/白	丸中腹・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	51	復元
第11回 28	SD1	陶器	茶	縞文	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	56	縦縞に沿って状の跡がある
第11回 29	SD1	陶器	茶	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	58	
第11回 30	SD1	陶器	茶	縞文	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	57	
第11回 32	深鉢付	縞文土器	深鉢	内・外縞と縞文	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	70	複数孔と重ねる跡がある
第11回 33	深鉢付	縞文土器	深鉢	山形縞文による多条文	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	64	
第11回 34	深鉢付	縞文土器	深鉢	山形縞文による多条文	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	65	
第11回 35	深鉢付	縞文土器	深鉢	山形縞文による平行底鉢	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	66	
第11回 36	深鉢付	縞文土器	深鉢	山形縞文による平行底鉢	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	66	
第11回 37	深鉢付	縞文土器	深鉢	山形縞文による多条文	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	67	
第11回 38	深鉢付	縞文土器	深鉢	内・外縞と縞文	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	69	
第11回 39	深鉢付	土器	茶	内・外縞と縞文	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	64	
第12回 40	土器	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	74	
第12回 41	土器	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	93	
第12回 42	深鉢付	縞文土器	深鉢	ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	13	復元難しい
第12回 43	深鉢付	縞文土器	深鉢	内・外縞と縞文	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	76	
第12回 44	深鉢付	縞文土器	深鉢	縞文ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	27	
第12回 45	深鉢付	縞文土器	深鉢	ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	28	
第12回 46	深鉢付	縞文土器	深鉢	ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	28	
第12回 47	深鉢付	縞文土器	深鉢	縞文土器 年輪竹節による平行底鉢	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	5	
第12回 48	深鉢付	縞文土器	深鉢	縞文土器 年輪竹節による平行底鉢	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	22	
第12回 49	深鉢付	縞文土器	深鉢	縞文土器 年輪竹節による平行底鉢	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	26	
第12回 50	深鉢付	縞文土器	深鉢	縞文土器 年輪竹節による平行底鉢	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	30	
第12回 51	深鉢付	縞文土器	深鉢	縞文土器 年輪竹節による平行底鉢 内面ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	14	
第12回 52	深鉢付	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	11	
第12回 53	深鉢付	縞文土器	深鉢	縞文ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	22	
第12回 54	深鉢付	縞文土器	深鉢	縞文ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	72	
第12回 55	深鉢付	縞文土器	深鉢	縞文ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	15	
第12回 56	深鉢付	縞文土器	深鉢	縞文ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	73	
第12回 57	土器	縞文土器	深鉢	縞文ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	82	
第12回 58	土器	縞文土器	深鉢	縞文ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	93	
第12回 59	T9-3	縞文土器	深鉢	縞文ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	19	
第12回 60	深鉢付	縞文土器	深鉢	内・外縞ナメ	赤褐色/白	丸底・高・赤色粒子	-	-	MテクSD1	3	

遺物番号	西番号	出土位置	種類	特徴	文様・装飾部	色調	断面・合掌形	直径 (cm)	底面 口径 直径 高さ	裏面 番号	備考		
第12号	61	TP1 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日	やや白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ71	68			
第13号	62	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日 内蓋下?	やや白/黒、赤色斑子	-	-	Mヤウ72	74			
第13号	63	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	内蓋下?【木方印】	明治7.5年5月6日	やや白/黒、赤、赤色斑子	-	-	Mヤウ73	23 横穴式灰陶		
第13号	64	TP1 無穴式	漆器	木漆器	内・外蓋下? 木方印	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ74	89 横穴式灰陶			
第13号	65	TP1 内 横穴式	漆器	木漆器	-	深朱漆	深朱漆	10.94/2	やや白/黒、赤、赤色斑子 花柄	-	Mヤウ75	77 横穴	
第13号	66	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ76	10 横穴式・赤褐色斑点・ 黄斑點付			
第13号	67	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ77	124			
第13号	68	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日 内蓋下?	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ78	4			
第13号	69	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ79	6			
第13号	70	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日 内蓋下?	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ80	7			
第13号	71	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日 内蓋下?	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ81	8			
第13号	72	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日 内蓋下?	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ82	12			
第13号	73	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日 内蓋下?	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ83	17			
第13号	74	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日 内蓋下?	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ84	18 特徴なし			
第13号	75	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日 内蓋下?	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ85	20			
第13号	76	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日 内蓋下?	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ86	21			
第13号	77	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日 内蓋下?	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ87	32			
第13号	78	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日 内蓋下?	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ88	83			
第13号	79	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日 内蓋下?	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ89	1			
第14号	80	遺物群 横穴式	漆器	木漆器	明治7.5年5月6日 内蓋下?	にやけ白/黒、赤色斑子 花柄	-	-	Mヤウ90	24			
第14号	81	Mヤウ-1 染付群	土器群	S字形	ハナメ(花口)	-	-	-	-	Mヤウ91	103		
第14号	82	遺物群 土器群	土器群	S字形	ハナメ(花口) 内蓋下?	伝SY65-6	墨刷/白、黒、赤色斑子 花柄	(7.0)	Mヤウ92	2			
第14号	83	遺物群 土器群	土器群	S字形	内蓋下?	伝SY65-6	白/黒、赤色斑子 花柄	-	Mヤウ93	31			
第14号	84	遺物群 土器群	土器群	S字形	内蓋下?	伝SY65-6	白/黒、赤色斑子 花柄	-	Mヤウ94	96 打鳴人式付			
第14号	85	TP4 土器群	土器群	S字形	ハナメ(花口)	にやけ白/黒SY65-6	白/花/黒、赤色斑子 花柄	-	Mヤウ95	91			
第14号	86	遺物群 土器群	土器群	S字形	内蓋下?	にやけ白/黒SY65-6	白/花/黒、赤色斑子 花柄	-	Mヤウ96	78			
第14号	87	TP4 土器群	土器群	S字形	内蓋下?	にやけ白/黒SY65-6	白/花/黒、赤色斑子 花柄	-	Mヤウ97	79			
第14号	88	TP4 土器群	土器群	S字形	内蓋下?	にやけ白/黒SY65-6	白/花/黒、赤色斑子 花柄	-	Mヤウ98	92			
第14号	89	遺物群 土器群	土器群	S字形	内蓋下?	にやけ白/黒SY65-6	白/花/黒、赤色斑子 花柄	-	Mヤウ99	9 伝鳴人式付			
第14号	90	遺物群 土器群	土器群	S字形	内蓋下?	にやけ白/黒SY65-6	白/花/黒、赤色斑子 花柄	-	Mヤウ100	84			
第14号	91	遺物群 土器群	土器群	S字形	内蓋下?	伝SY65-6	白/花/黒、赤色斑子 花柄	(11.0) (7.0) (2.5)	Mヤウ101	33			
第14号	92	遺物群 土器群	土器群	S字形	内蓋下?	伝SY65-6	白/花/黒、赤色斑子 花柄	-	Mヤウ102	80			
第14号	93	遺物群 土器群	土器群	S字形	内蓋下?	伝SY65-6	白/花/黒、赤色斑子 花柄	-	Mヤウ103	86			
第14号	94	遺物群 土器群	土器群	S字形	内蓋下?	伝SY65-6	白/花/黒、赤色斑子 花柄	-	Mヤウ104	88			
第14号	95	遺物群 土器群	土器群	S字形	内蓋下?	伝SY65-6	白/花/黒、赤色斑子 花柄	-	Mヤウ105	91			

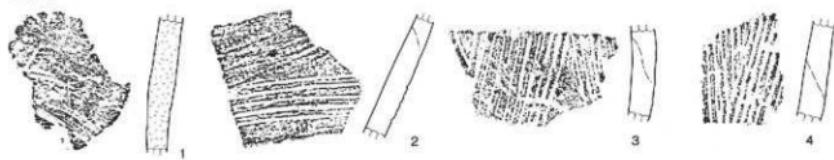
第4表 出土遺物観察表（石器・石製品類）

遺物番号	西番号	出土位置	材質	種別	直徑 (cm)	厚さ (mm)	さき (cm)	記述	実測番号	備考
第15号	89	SD1 土器群	陶器	人型バイオ	2.78	3.55	0.99	9.67	Mヤウ1350	99 便用瓶 (丸底多孔)
第15号	97	TP4 土器群	石瓶	人型	1.69	0.91	0.20	0.52	Mヤウ1355	100
第15号	98	遺物群 石器 (火薙)	石器	-	2.12	2.18	0.65	3.97	Mヤウ1356	102
第15号	99	遺物群 石器 (火薙)	石器	打目か	2.68	1.85	0.71	3.44	Mヤウ1353	101 針状孔有
第15号	100	遺物群 石器 (火薙)	石器	打目か	7.62	0.26	1.55	10.26	Mヤウ1354	96 鋸片
第15号	101	遺物群 石器 (火薙)	石器	打目か	3.77	2.40	0.66	14.20	Mヤウ1313	96
第15号	102	遺物群 石器 (火薙)	石器	打目か	4.11	0.65	0.75	6.07	Mヤウ1355	97
石器類	91	一鉢	石器 (火薙)	-	-	-	-	0.30	Mヤウ1356	-
石器類	92	一鉢	石器 (火薙)	-	-	-	-	0.30	Mヤウ1357	-
石器類	93	一鉢	石器 (火薙)	-	-	-	-	0.30	Mヤウ1358	-
石器類	94	一鉢	石器 (火薙)	-	-	-	-	0.30	Mヤウ1359	-
石器類	95	一鉢	石器 (火薙)	-	-	-	-	0.30	Mヤウ1360	-
石器類	96	碗	石器 (火薙)	-	-	-	-	10.67	Mヤウ1361	-

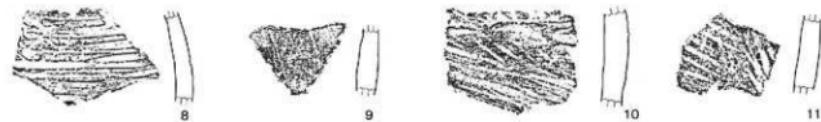
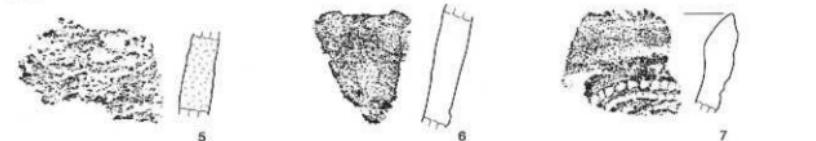
第5表 出土遺物観察表（古錢）

遺物番号	西番号	出土位置	種類	直徑 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	記述	実測番号	備考
第11号	31	SD1 天然/砂	瓦當	2.16	2.25	0.65	1.05	Mヤウ1351	87

SK 1



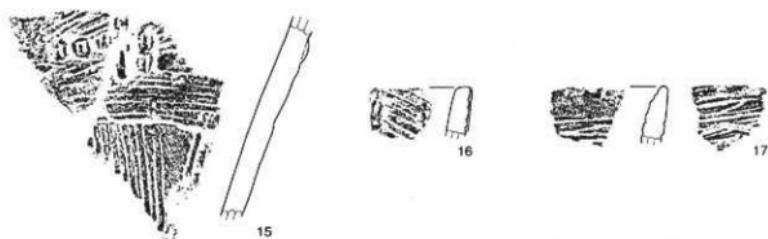
SK 3



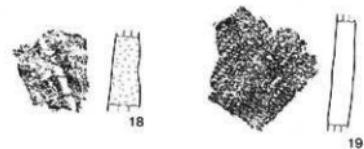
SK 4



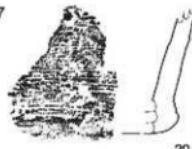
Pit 1



Pit 2



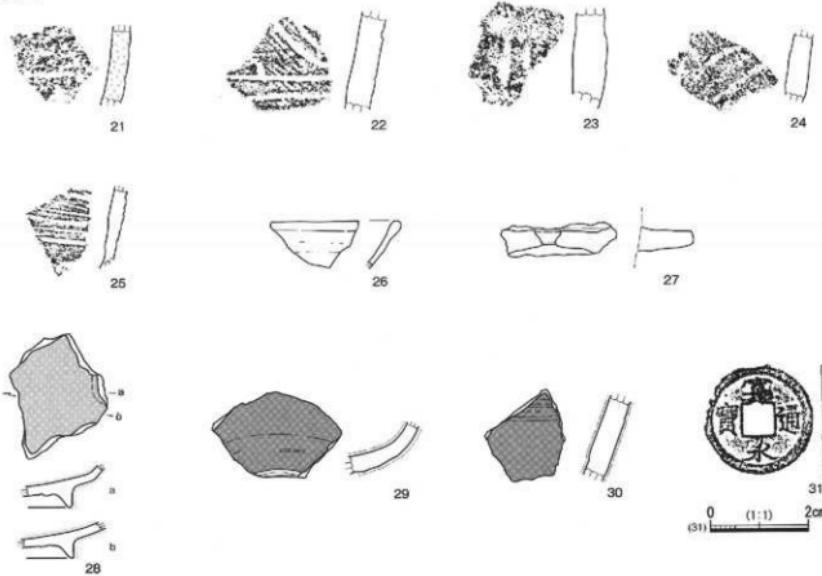
Pit 7



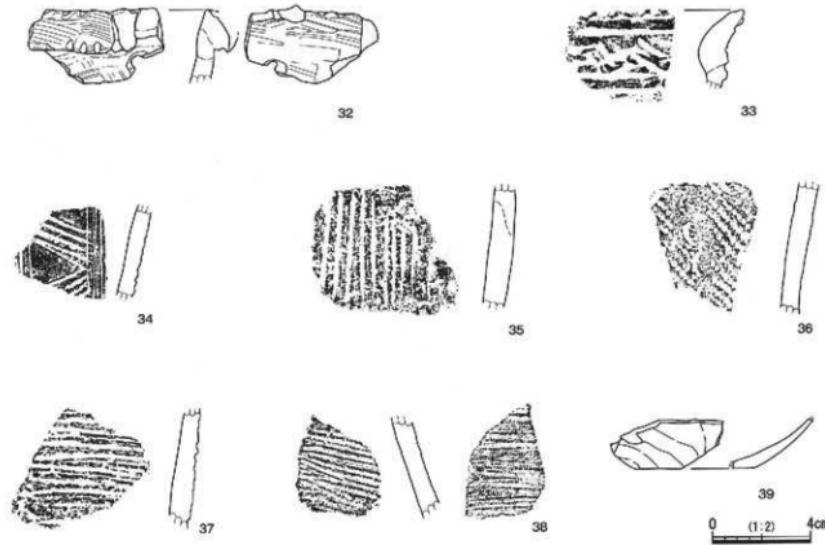
0 (1:2) 4cm

第10図 出土遺物 (SK1・3・4、Pit1・2・7)

SD 1

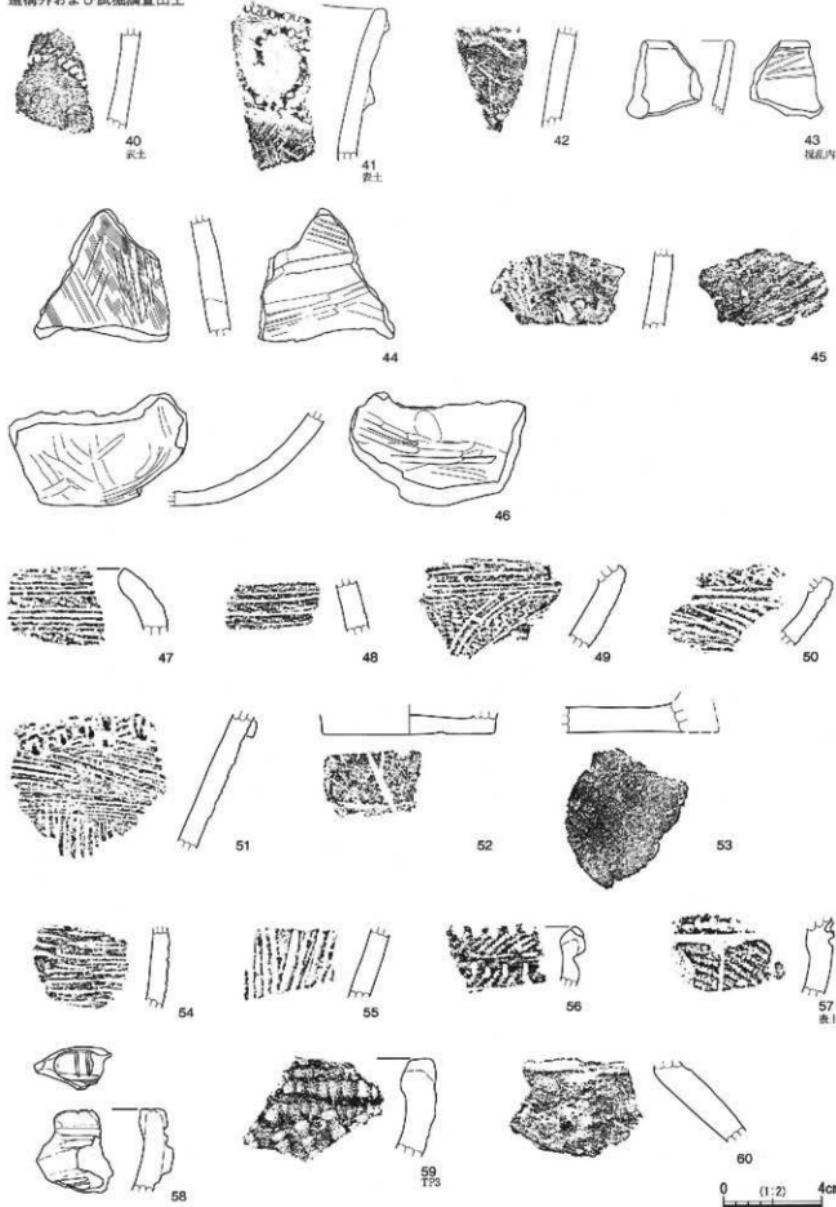


調査区西端トレンチ内一括

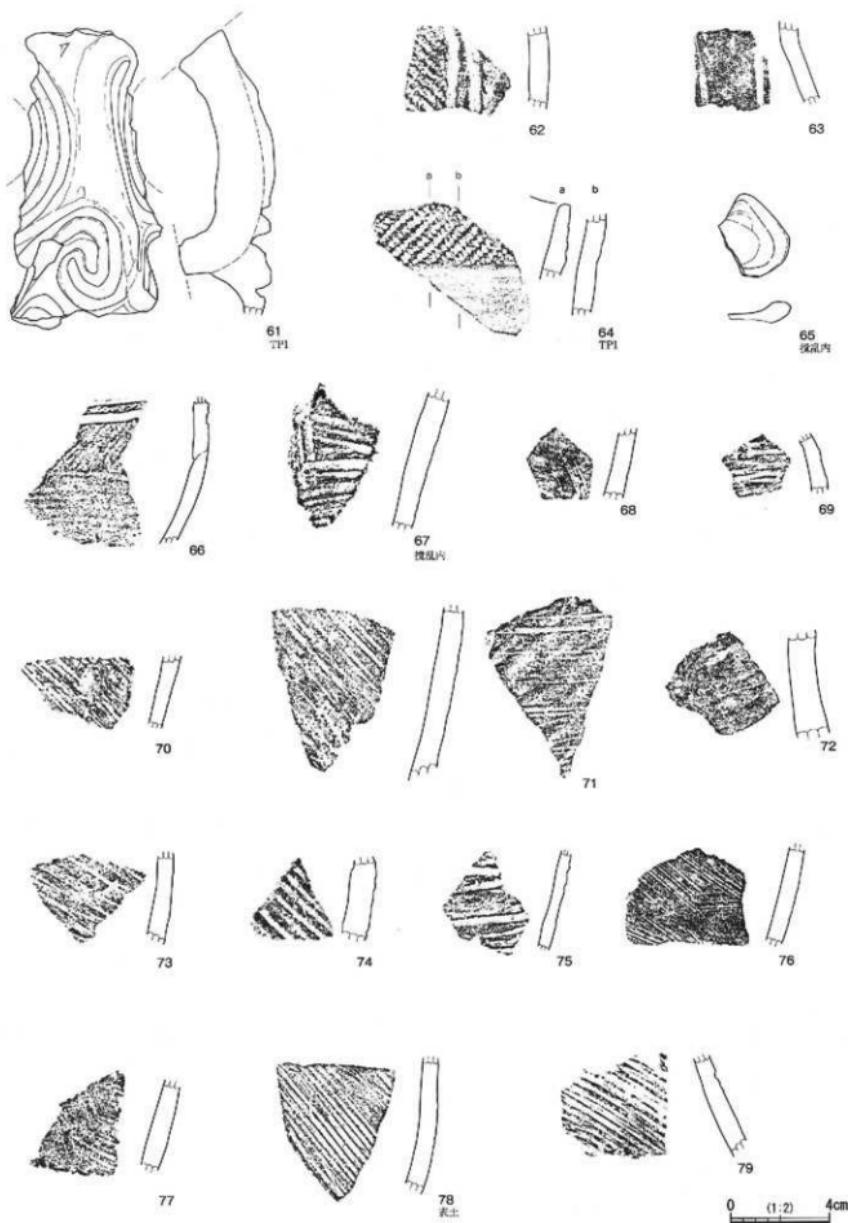


第 11 図 出土遺物 (SD1、調査区西端)

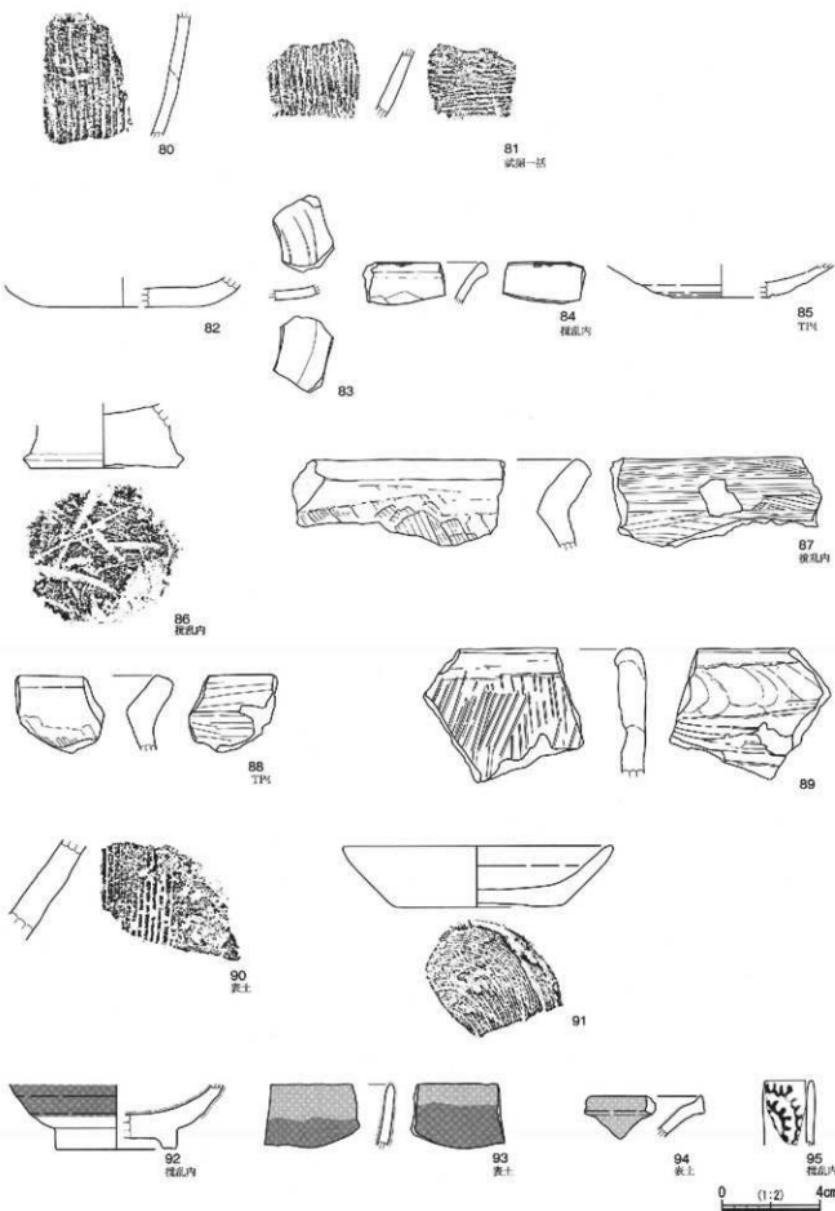
遺構外および試掘調査出土



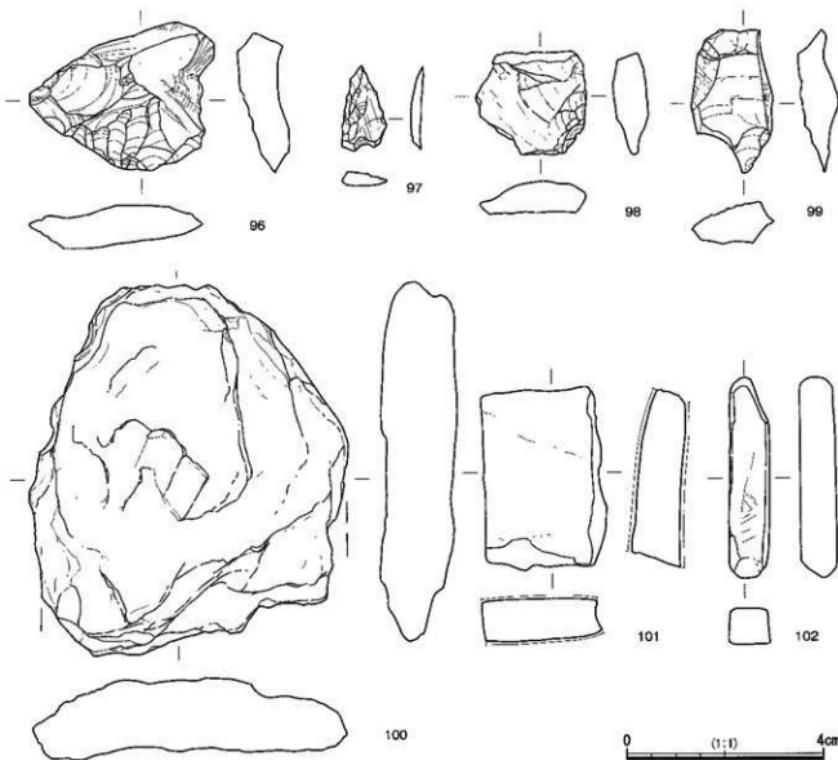
第12図 出土遺物(遺構外・試掘 1)



第13図 出土遺物（遺構外・試掘2）



第14図 出土遺物（遺構外・試掘3）



第15図 出土遺物（石器・石製品）

第5章 総括

第1節 検出した遺構・遺物について

今回の調査成果は、縄文時代・平安時代の遺跡と周知されてきた本遺跡において、縄文時代の遺構とともに、弥生時代の遺構の存在が明らかになったこと、また平安時代の遺物が出土した東西方向に延びる溝状遺構（SD 1）を検出したことがあげられ、地域の歴史を解明していく上で貴重な資料が得られたといえる。

土坑については検出した5基のうち、SK 1・3・5は深さ70cmを超えた。遺構年代については、SK 1は縄文時代、SK 3については覆土および遺構周辺から遺物が確認されたことから、弥生時代の遺構と位置づけた。しかし調査時の所見では、縄文時代・弥生時代の遺構覆土は包含する遺物以外、ほとんど差は認められなかった。遺構の埋没状況はほぼ一定で、重複していたSK 2・3は覆土の断面観察でも重複関係が不鮮明で新旧の断定はできなかった。SD 1については断面観察や遺物出土状況および聞き取りによる情報から検討し、水路や地境の用途を推定した。限られた範囲と搅乱の影響があって明確な軸方向は見出せなかつたが、遺物の出土状況などから遺構がほぼ同じ位置に造られ、または掘り直しが行われた可能性を推定した。

以下、今回の調査成果を踏まえ、第2・3節で今後の課題について取上げておきたい。

第2節 繩文時代早期末の遺物に伴う水晶片について

今回、限られた調査区のなかで際立ったのは、縩文時代早期の土器片を包含する層から、水晶（石英）片が多数出土したことである。第4章でも触れたが、県内では縩文時代早期の土器と水晶の出土が確認された事例が多数あり、本遺跡周辺では、牧丘町倉科の奥豊原遺跡、甲府市上黒平の宮ノ前遺跡、下黒平の判半遺跡のほか、水晶石器加工跡とする遺構を検出した甲州市竹森の乙木田遺跡などが知られている。

なかでも本遺跡と近い奥豊原遺跡の位置づけについて、発掘調査を実施した山梨学院大学・十渡駿武氏は、出土した水晶の透明度から原産地を乙女坂と推定し、柳平・焼山峠・小幡山の尾根筋を経て、甲府盆地周辺の集落へ水晶や他の資材を供給した水晶加工・中継集落と推定されている。一方、甲府盆地を挟んだ駿迦堂遺跡においても、縩文時代早期～前期には住居跡出土フレイクの重量比から「水晶の使用頻度が他の時期に比べて著しく高い」と報告書に記載されている。

今回の調査で検出した水晶および縩文時代早期末の土器片については、再堆積層中から出土したもので、明確な遺構は検出されなかった。しかし県内事例からみても、同時期に水晶が利用される傾向があったことは確かといえる。本遺跡周辺もその傾向に沿った事例のひとつになろう。水晶の流通に関しては産地同定が非常に困難で経路や形態についてなど、検討課題は山積している。今後の調査成果を待ち、同地域の性格が解明されていくことを期待したい。

第3節 牧莊についての若干の考察

前述の通り、牧莊は少なくとも12世紀後半には成立し、安田義定以降、拠点や要衝地とされてきたことがわかる。しかし同地域においては、地名の由来とされる牧自体に関する遺構・遺物はこれまで確認されておらず、その実は明確になっていない。同莊に関連する牧についての文献では、「吾妻鏡」第十四巻建久五(1194)年三月十三日条に「甲戌甲斐国武河御牧駒八疋參着」がある。これについて『甲斐国志』卷之二国法之部では、「武河ハ今竹川ニ作ル山梨郡牧之庄ニ在リ西保・中摩木ト馬城ヲ分ツ牧平・竹川ハ西保ノ内ナリ」と見え、同莊の西保に牧があったとしている。牧は11世紀以降、次第に開発耕地化されて莊園化していくとされるが、上記によれば同莊では12世紀後半においても馬に関わる施設の存在が示されることになる。

武河牧については、卷之三十八古跡部第一で「東鑑ニ武河ト書タル故ニ巨麻郡ノ武河ニ混ジリタリ」と曰く、摩郡の武河ではなく、同調の西保にある竹川との混同で「牧ノ莊ノ内一般ノ馬城ト見エタリ」とある。この「一般の牧」が表すのが、当時の状況を示しているのか、羅漢寺の坐像底銘にある「御牧庄」について古代の官牧との関連性を否定する意味であるのかは不明である。また馬城については、『甲斐国志』は大村直に關する記述においても、「馬城ヲ三段ニ分ケテ」とあり、同莊内には少なくとも中牧・西保の2箇所に区画された牧施設の存在が推定される。そこで、今回の調査地を中牧にあった施設の一画と推定し、次の点を述べておく。

報告の通り、SD1は千野々宮と窪平の地境に沿ったかたちで東西へ延びていたと推定し、年代は9C末～10C前半頃まで遡る可能性がある。これに関連して注目されるのが、市教委が調査した本調査区西側の隣接地で検出された平安時代の堅穴住居跡から、「門」・「糸ヶ」・「縫ヶ」と墨書きされた9～10C代の土師器坏(図版11)が出土したことである。まだ未報告の資料のため検討が足りず、推定の域をでないが、この「門」が文字通り区画施設の出入口を示すとするならば、SD1は施設の区画を成していた溝の一部の可能性がある。なお、この地盤は柚口方面から南北に細長く、西は段丘面、東は河岸傾斜面の琴川河岸段丘の端部に近い場所にあり、これより下ると両端ともに緩やかに広がる地形となっている。以上の点から、甲斐国志にみられる「馬城」の呼び名に相応する施設が、本調査区から北側に存在していた可能性を指摘しておきたい。おわりに 今回の調査は、わずか約51m²という狭小な調査であったが、この地域の特色ある生活の痕跡を確認することができた。課題として取上げた点についてはご叱正を頂戴し、今後の調査研究の契機としてさらに検討を重ねていくことにしたい。本書が今後の調査研究および地域教育の一助となれば幸いである。

本調査を実施するにあたっては、山梨県・山梨市農務事務所並びに山梨市教育委員会、発掘調査および整理報告業務に従事して頂いたスタッフ、その他関係者の皆様には多大なる御理解と御協力を頂戴しました。末筆となりましたが、記して心より御礼申し上げます。



調査地点から（北東方面）



調査地点から（東方面）



調査地点から（南東方面）



調査地点から（南方面）



調査区全景

図版2

調査前・完掘後近景



調査前（東から）



調査前（西から）



完掘後（東から）



完掘後（西から）



SK1 半截状況



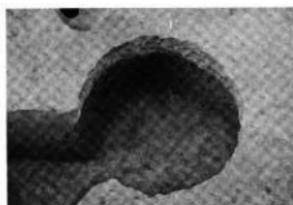
SK1 半截状況



SK1 半截状況



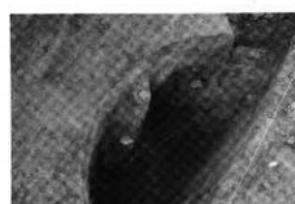
SK1 完掘状況



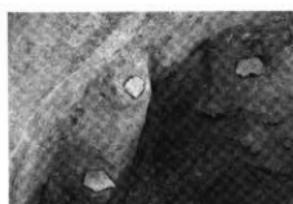
SK1 完掘状況



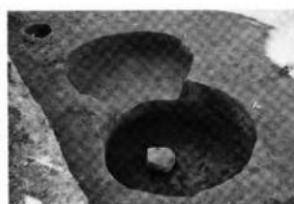
SK2・3 半截状況



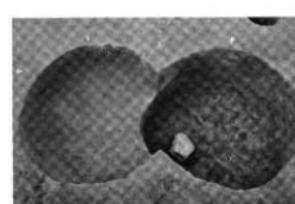
SK2・3 遺物出土状況



SK2・3 遺物出土状況



SK2・3 完掘状況



SK2・3 完掘状況



SK4 半截状況



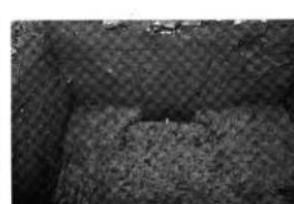
SK4 完掘状況



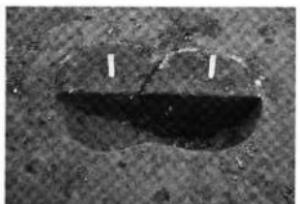
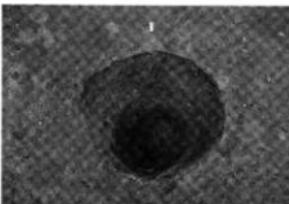
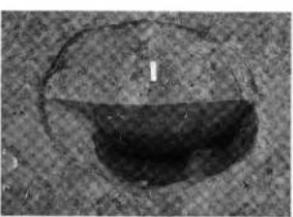
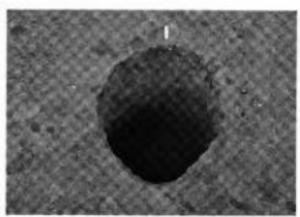
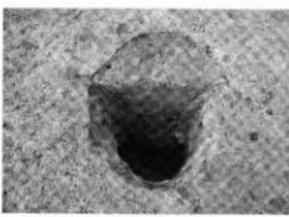
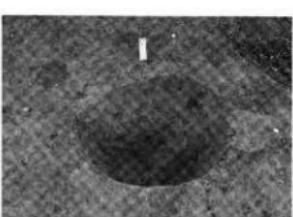
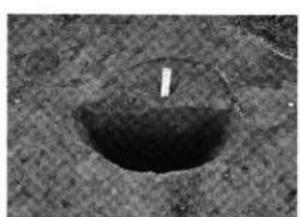
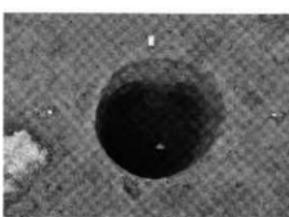
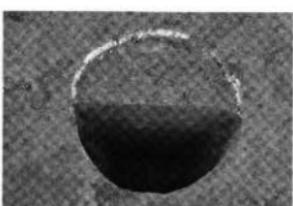
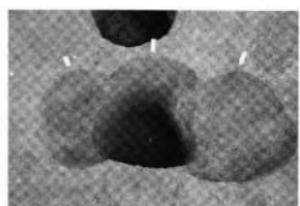
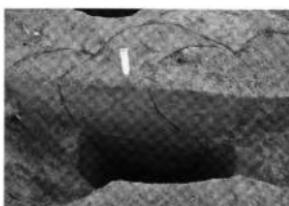
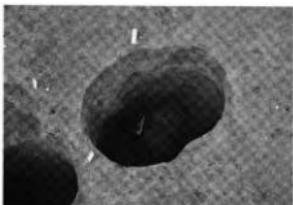
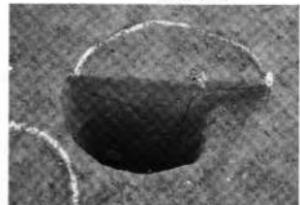
SK4 完掘状況



SK5 完掘状況

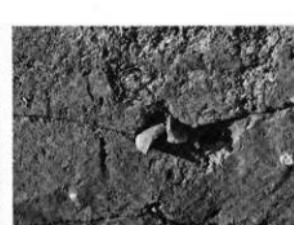
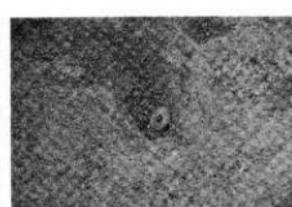
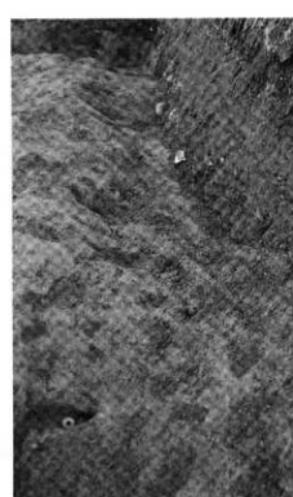
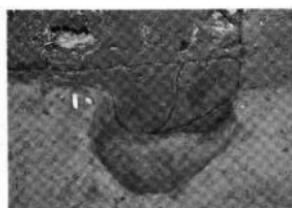
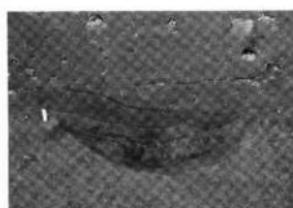
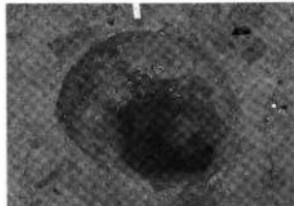
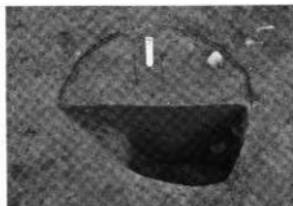


SK5 完掘状況



遺構写真

図版 5





調査風景



調査風景



調査風景



調査風景 (測量)



調査風景 (測量委託)



現場確認風景



現場確認風景



埋め戻し状況



埋め戻し後状況



御堂 (精進家屋敷神)



薬師如来像 (木造)



中牧神社境内

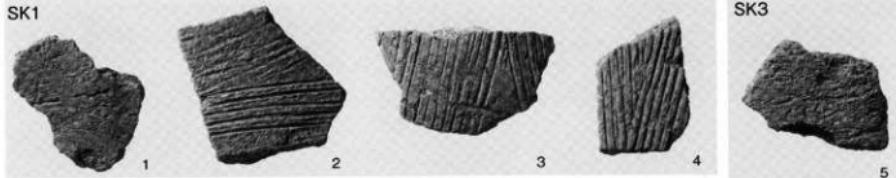


御堂脇・六地蔵石幢

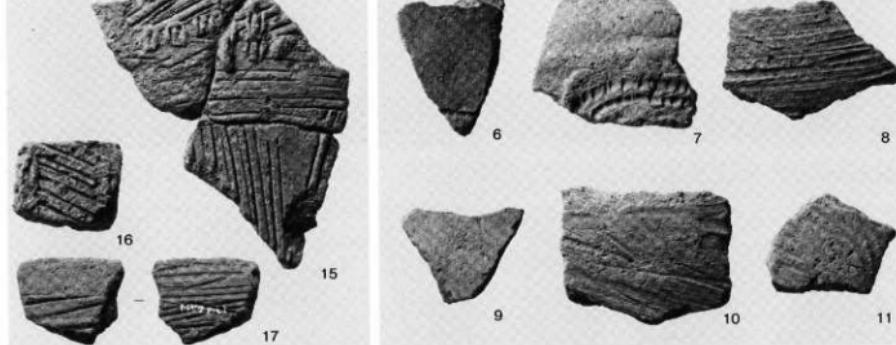


中牧神社本殿

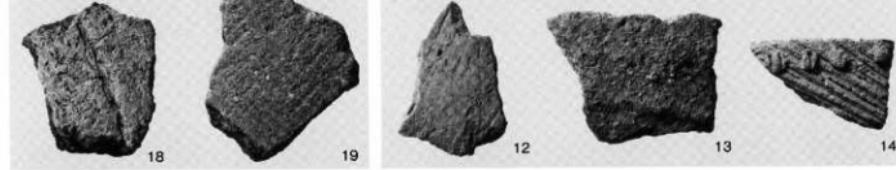
SK1



Pit1



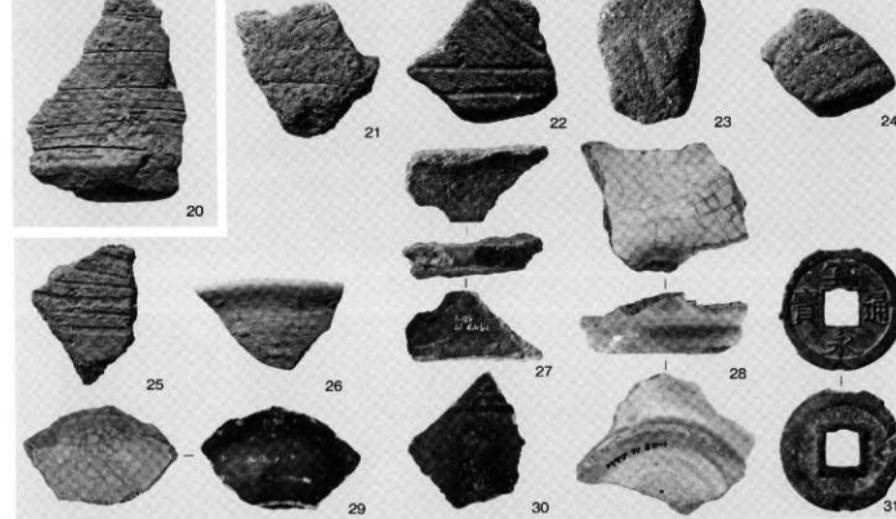
Pit2



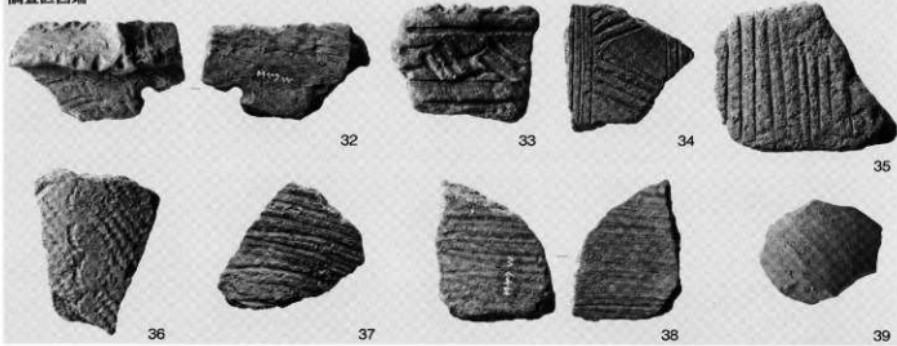
SK4



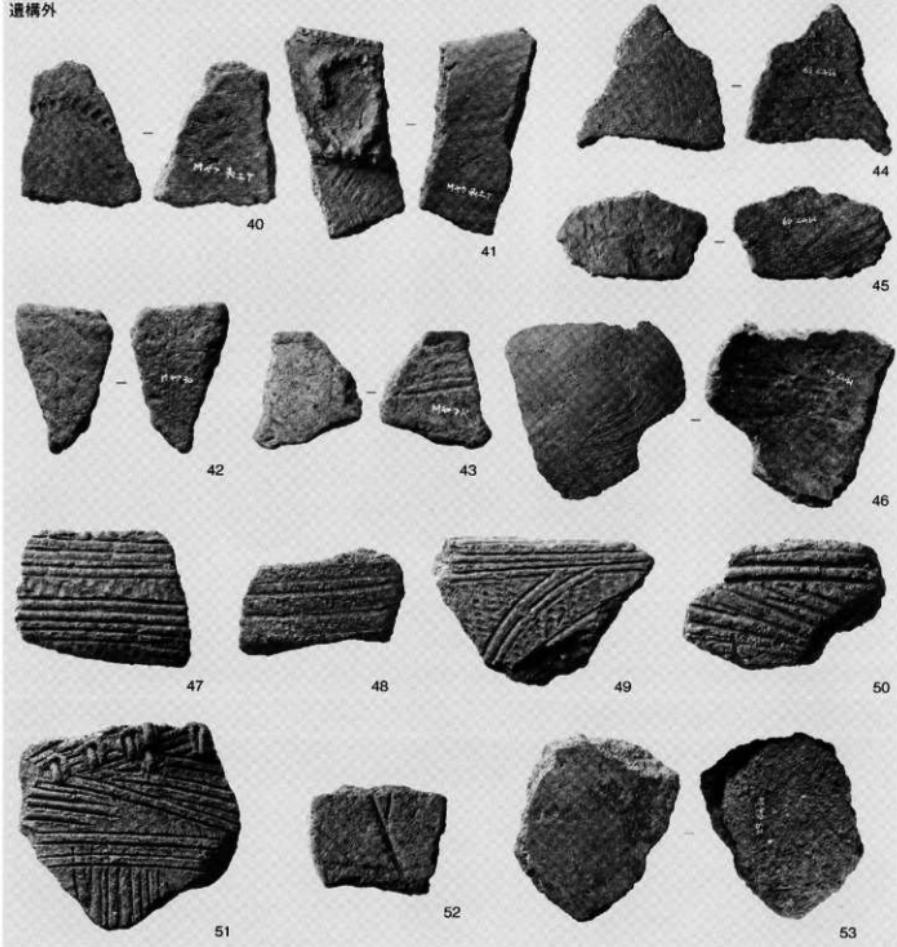
Pit7

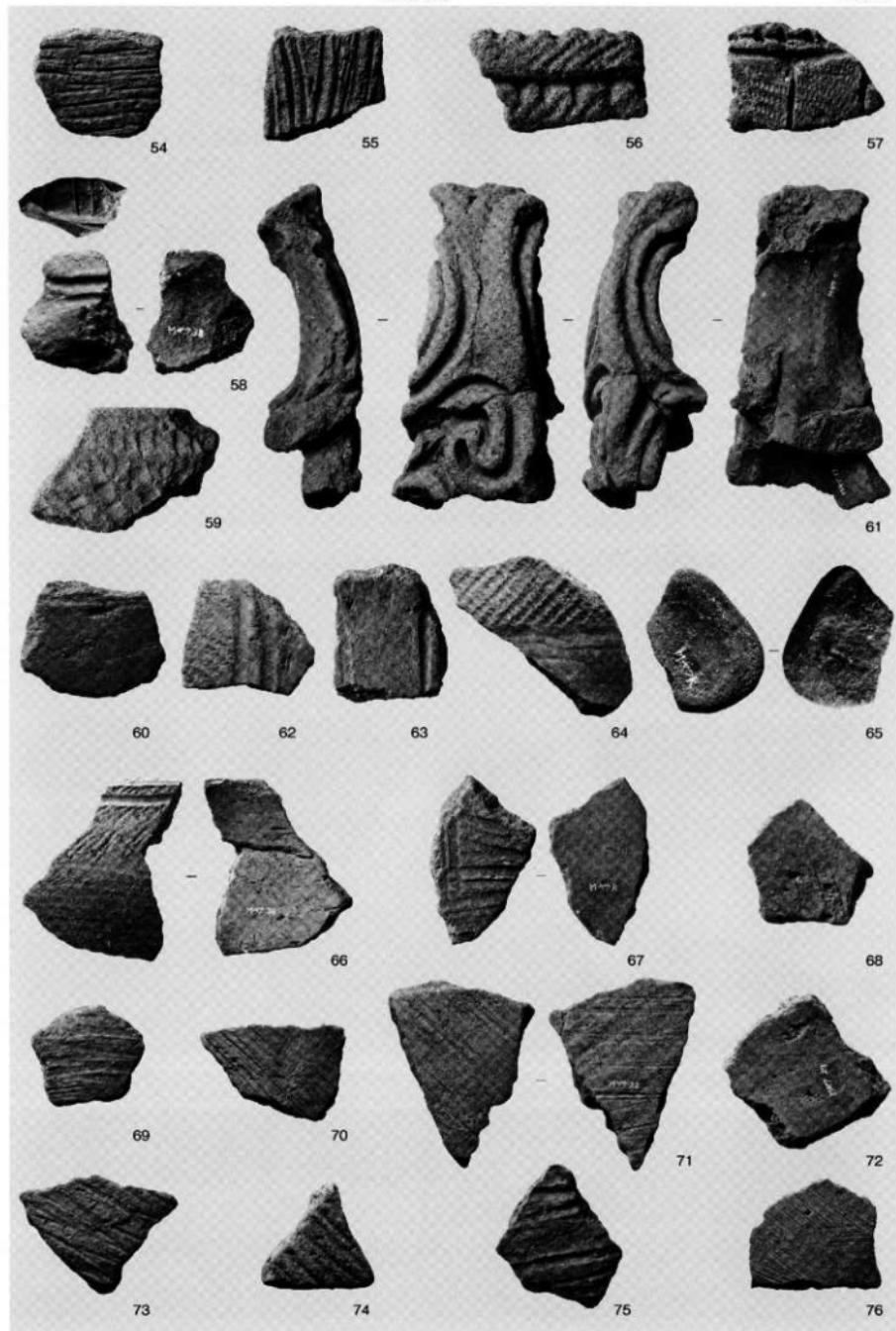


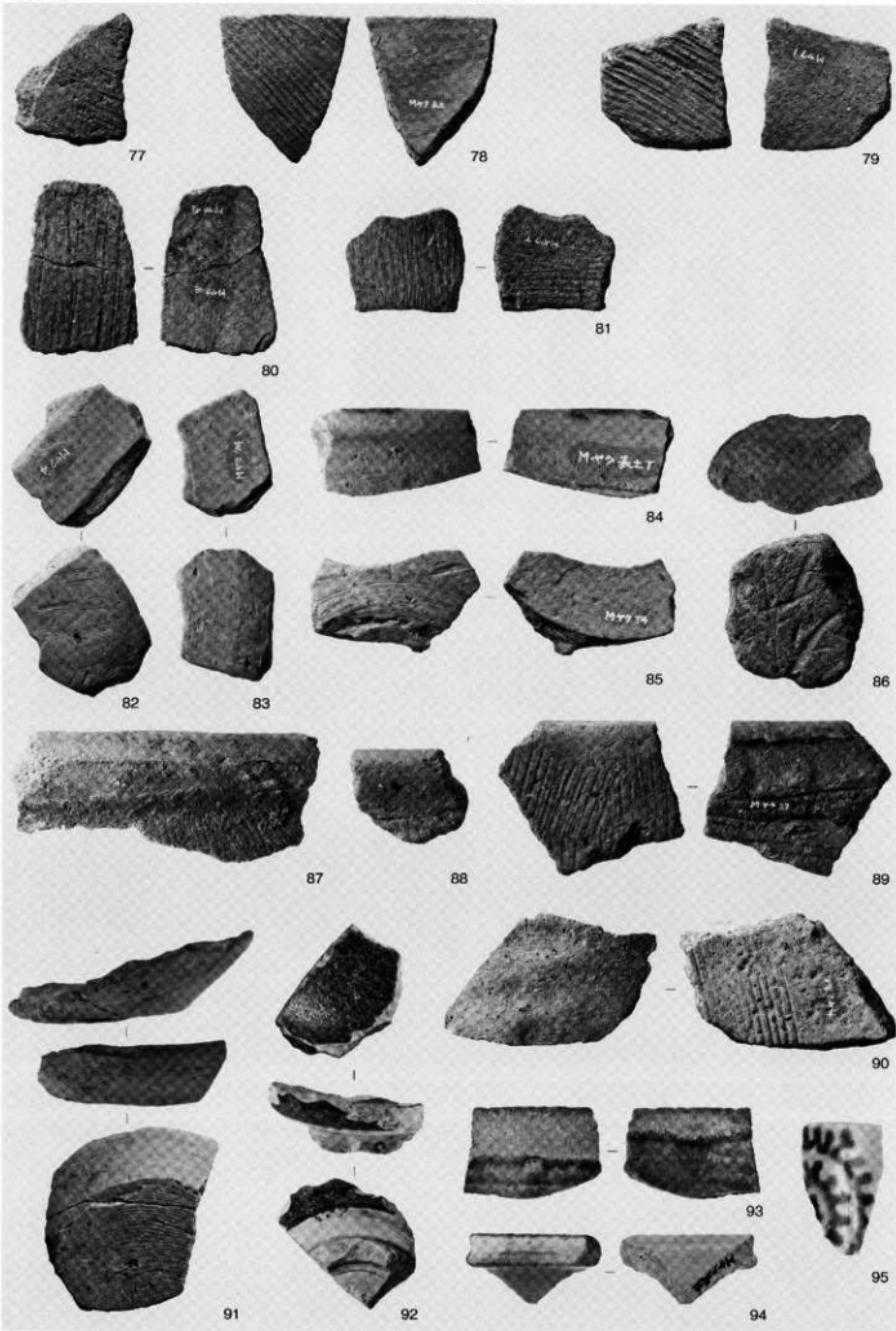
調査区西端



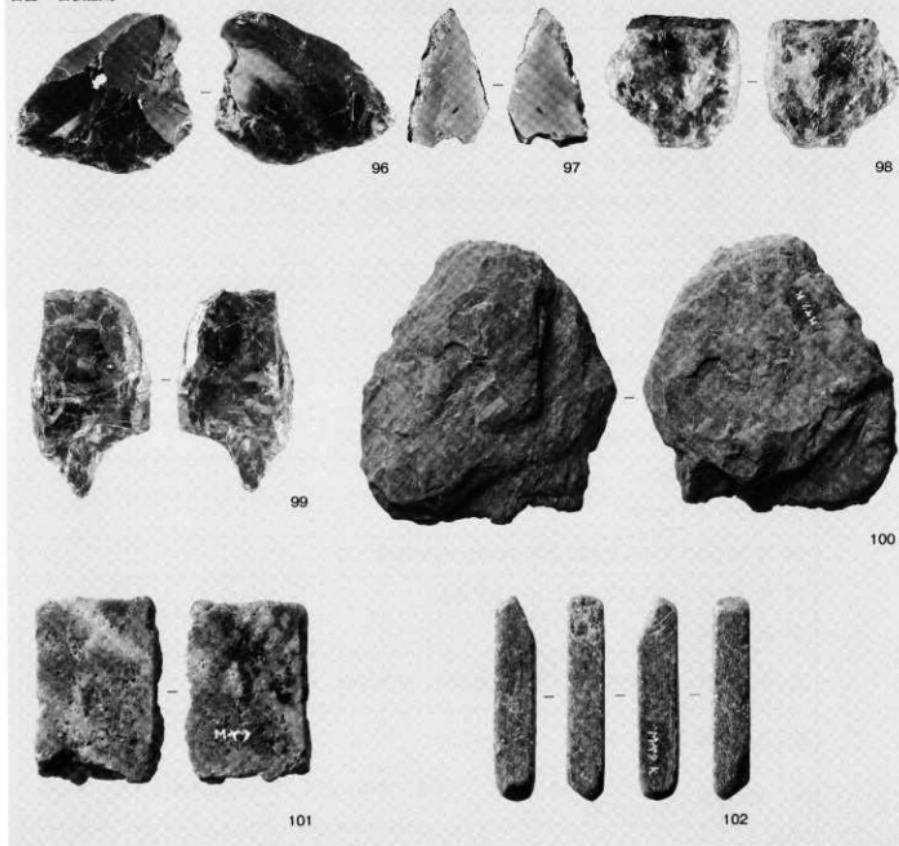
遺構外



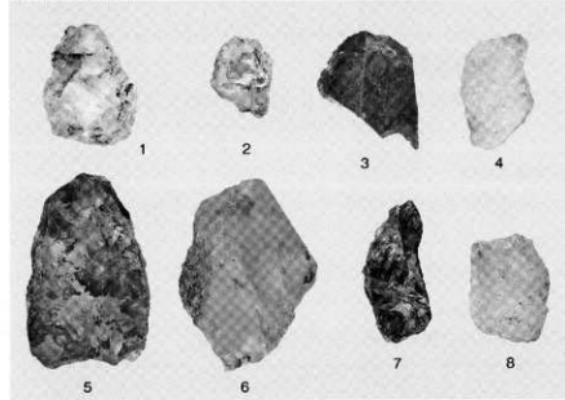




石器・石製品等



調査区出土水晶片



市教委調査区出土 墨書き器



薬師堂遺跡報告書抄録

ふりがな	やくしどういせき
書名	薬師堂遺跡
副書名	牧丘東部地区用排水路第12号の整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
著者名	望月秀和
発行者	山梨県峠東農務事務所・山梨市教育委員会・財団法人山梨文化財研究所
編集機関	財団法人山梨文化財研究所
住所・電話	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566 Tel 055-263-6441
印刷日	平成24年3月1日
発行日	平成24年3月15日
所在地	山梨県山梨市牧丘町千野々宮・窪平
位置	北緯35度44分56秒 東経138度42分38秒
標高	555m
市町村コード	19205
調査原因	牧丘東部地区用排水路第12号の整備工事
調査期間	平成23年1月11日～1月28日
調査面積	約51m ²
造	主な時代 縄文時代早期・前期・中期末、弥生時代、平安時代
跡	主な遺構 土坑、溝
概	主な遺物 縄文時代早期・前期・中期末の土器、石器、弥生時代後期の土器、平安時代の土師器
要	特記事項 フラスコ状の土坑、地割溝

薬師堂遺跡

—牧丘東部地区用排水路第12号の整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成24年3月15日 発行

編集・発行 山梨県峠東農務事務所

〒404-8601 甲州市塩山上塩後1239-1 Tel 0553-20-2706

山梨市教育委員会

〒405-8501 山梨県山梨市小原西843生涯学習課 Tel 0553-22-1111

財団法人 山梨文化財研究所

山梨県笛吹市石和町四日市場1566 Tel 055-263-6441

